

創立30周年

記念誌

補聴器 業界の 歩み



一般社団法人 日本補聴器工業会

一般社団法人 日本補聴器販売店協会

創立30周年

記念誌

補聴器 業界の 歩み



一般社団法人 日本補聴器工業会

一般社団法人 日本補聴器販売店協会

目次

ご挨拶 創立30周年記念誌発刊にあたって

一般社団法人 日本補聴器工業会
理事長 成沢 良幸 2

一般社団法人 日本補聴器販売店協会
理事長 佐藤 誠 3

1 30年の歩み

日本補聴器工業会・日本補聴器販売店協会 沿革 5

2 日本の補聴器の歴史

日本における補聴器開発の歴史 23

3 海外の補聴器の歴史

海外における補聴器開発の歴史 37

海外における補聴器流通の歴史 46

欧州における補聴器技能者の養成 48

4 座談会「補聴器・よもやま話」

補聴器業界の歴史と未来への提言 51

5 資料編

日本補聴器工業会・日本補聴器販売店協会
歴代理事長・副理事長 76

日本補聴器工業会・日本補聴器販売店協会
組織図 78

日本補聴器工業会加盟社一覧・
日本補聴器販売店協会加盟店数の推移 80

「認定補聴器技能者数」の推移 82

「認定補聴器専門店数」の推移 83

参考文献・資料提供 85

編集後記

創立30周年記念誌編纂委員会
委員長 木村 修造 86

創立30周年記念誌発刊にあたって



一般社団法人 日本補聴器工業会
理事長 成沢 良幸

一般社団法人日本補聴器工業会は2018年(平成30年)6月7日をもちまして創立30周年を迎えました。

これもひとえに、会員会社ならびに賛助会員の皆様、厚生労働省をはじめとする行政機関、聴覚関連の医学会の皆様、聴覚障害児の教育関係の皆様、福祉関係団体の皆様、テクノエイド協会、及びすべての補聴器ユーザーの皆様のご指導・ご支援の賜物と感謝申し上げます。

当会は、1988年(昭和63年)6月に、国内に補聴器を生産供給するメーカーの集まり「全国補聴器メーカー協議会」として設立され、2003年(平成15年)6月に「有限責任中間法人日本補聴器工業会」に移行し、2009年(平成21年)6月に「一般社団法人日本補聴器工業会」へ名称変更し現在に至っております。

当会は、補聴器とその関連機器を通じて、人々の健康・福祉への貢献と、質の高い生活の実現に寄与することを理念に、この30年間、同じくこの度創立30周年を迎えた日本補聴器販売店協会、並びにテクノエイド協会、そして日本補聴器技能者協会とともに、難聴の方々へ補聴器を適正に安全に供給できる仕組みづくりを目指して鋭意活動してまいりました。ここに、創立30周年を迎え、日本補聴器販売店協会と合同でこれまでの活動を編纂し記念誌として刊行いたしました。

当会のこれまでの30年間に賜りました皆様のご厚情に深く感謝申し上げますとともに、補聴器による難聴への貢献の更なる進展のために一層のご支援、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。



一般社団法人 日本補聴器販売店協会
理事長 佐藤 誠

創立30周年を迎えるにあたりご挨拶申し上げます。当協会は1988年(昭和63年)に補聴器技能者の資格制度の確立を目指し設立いたしました。この30年でデジタル化や通信技術の発達、高齢化の進展など補聴器販売も大きく変化してきました。その時々課題に向きあい積極的に対応しながら協会活動が展開できましたのは、全国の加盟店や、同じく創立30周年を迎える一般社団法人日本補聴器工業会(以下、日補工)をはじめとして、医学会や関係諸団体の皆様方のご支援とご協力の賜物と心より厚く御礼を申し上げます。

現在、我が国では健康寿命の延伸に向けた様々な取り組みがなされ、補聴器への期待も益々高くなってきております。しかしながら、国民生活センターへの補聴器の相談・苦情が多く寄せられていること、日補工が実施している市場調査報告「JapanTrak」にみられるように、我が国の補聴器に対する理解や満足度は決して高いとは言えない状況です。その原因のひとつとして販売従事者の知識や技能の不足が指摘されており、平成28年度から厚生労働省の委託事業として補聴器販売者技能向上研修が開始され、全国で基礎的な研修会を実施しております。この事業により認定補聴器技能者の拡充が期待され、一定の知識・技能を有する技能者による安全で効果的な補聴器販売の実現に向けて取り組んでいるところです。

補聴器の供給環境には未だ多くの課題がありますが、当協会は補聴器装用者の健康で豊かな生活のために、認定補聴器技能者資格の取得推進、店舗設備の充実、医療との連携をもって、お客様の安全・安心に資するサービスを提供してまいりたいと存じます。加盟店、関係諸団体の皆様には引き続きご支援ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

創立30周年
記念誌

補聴器
業界の
歩み

1

30年の歩み

30年の歩み

年	日本補聴器工業会	日本補聴器工業会・日本補聴器販売店協会 合同事業	日本補聴器販売店協会	関連事項
1978年 (昭和53年)				・ 全国補聴器振興協会設立
1983年 (昭和58年)				・社団法人日本耳鼻咽喉科学会の要請により厚生省が「補聴器判定医師研修会」を開始
1986年 (昭和61年)				・社団法人日本耳鼻咽喉科学会の要請により、関係者による補聴器士の法制化実現のため「ヒヤリングシステム研究会」を設立、補聴器士国家認定資格制度(案)を検討
1987年 (昭和62年)				・厚生省が検討する補聴器士の法制化に提案 厚生省の諮問機関である「新たな医療関係職種の資格制度の在り方に関する検討会」から中間報告が発出 補聴器士の必要性を認めるものの「医療機関の外で診療の補助に当たる行為が行われることをどう考えるか等の法制上の問題が残されており、更に検討を加える必要がある」とされ、「当面、自主的な認定制度を導入するなどにより適正な資質の確保に努めるべきである」との意見により法制化が見送られた
1988年 (昭和63年)	・ 全国補聴器メーカー協議会設立 ・資格制度委員会発足(認定資格制度の導入に当たり、検討のための専門委員会)		・ 全国補聴器販売店協会設立 ・機関誌「FITTING」創刊 ・機関誌編集、組織運営、認定制度対策の3専門委員会を設置	・財団法人テクノエイド協会設立 ・テクノエイド協会補聴器部会設置(部長:岡本途也先生)
1989年 (平成元年)	・「耳の日ポスター」(日本耳鼻咽喉科学会主催)の制作に協賛		・全国に支部を設置 ・会員実態調査を実施 ・倫理綱領を制定 ・テクノエイド協会補聴器部会に関連した研修委員会を設置	
1990年 (平成2年)	・「 耳の日補聴器相談会 」(日本耳鼻咽喉科学会開催)への協力要員派遣開始 ・普及委員会・販売情報委員会を設置 ・全国補聴器販売店協会九州沖縄支部講習会他1カ所へ講師・要員派遣	・全国補聴器メーカー協議会と全国補聴器販売店協会が初の合同会議を開催	・自主認定制度についてアンケート調査を実施 ・認定制度対策委員会を資格制度委員会に改称 ・情報委員会を設置 ・第1回補聴器技能者講習会へ講師・運営要員等を派遣	・ 第1回補聴器技能者講習会開催(テクノエイド協会主催)
1991年 (平成3年)	・全国補聴器販売店協会東海支部講習会他5カ所へ講師・要員派遣		・第2回補聴器技能者講習会へ講師・運営要員等を派遣	
1992年 (平成4年)	・国際眼鏡展示会講習会等へ講師・要員派遣 ・ 第1回「補聴器普及啓蒙のつどい」開催 ・小冊子「補聴器のはなし」(初版)発行		・全国補聴器販売店協会支部長会議を開催 ・補聴器技能者資格制度検討会を設置 ・第3回補聴器技能者講習会へ講師・運営要員等を派遣 ・International Hearing Society (IHS:国際補聴器協会)と意見交換会を開催	・テクノエイド協会補聴器部会に補聴器技能者資格制度検討会設置 ・認定補聴器技能者要綱(案)を作成



全国補聴器メーカー協議会定期総会



全国補聴器販売店協会設立総会



機関誌「FITTING」初期表紙類



第1回補聴器技能者講習会

年	日本補聴器工業会	日本補聴器工業会・日本補聴器販売店協会 合同事業	日本補聴器販売店協会	関連事項
1993年 (平成5年)	<ul style="list-style-type: none"> 日本耳鼻咽喉科学会専門医講習会等へ講師・要員派遣 第2回「補聴器普及啓発のつどい」開催 「補聴器のはなし」(改訂版)発行 渉外委員会設置 補聴器および音に関する調査研究(全国社会福祉協議会)に参加 	<ul style="list-style-type: none"> 普及・情報合同委員会を開催 	<ul style="list-style-type: none"> 補聴器専門店認定に関する委員会を開催 認定補聴器技能者試験「事前講習会」を開催(54名受講) 「補聴器専門店認定協会」設立準備会を開催 第4回補聴器技能者講習会へ講師・運営要員等を派遣 	<ul style="list-style-type: none"> 認定補聴器技能者制度が開始 第1回認定補聴器技能者試験実施(テクノエイド協会、53名合格) 補聴器技能士の認定制度のための研究強化プロジェクトが発足(厚生省) 福祉用具の研究開発及び普及の促進に関する法律が施行 補聴器研究開発強化委員会を設置(テクノエイド協会) 第1回「重度・最重度難聴に関する国際フォーラム」開催(難聴に関する国際フォーラム主催)
1994年 (平成6年)	<ul style="list-style-type: none"> 全国補聴器販売店協会関東支部講習会等へ講師・要員派遣 「補聴器はいま」(日本経済新聞朝刊、1ページ広告)出稿 全国補聴器専門店認定協会に理事として参加 技術委員会設置 厚生省生活衛生局(当時)に空気電池の普及・出荷状況を報告 	<ul style="list-style-type: none"> 普及・情報合同委員会を開催 	<ul style="list-style-type: none"> 補聴器専門店認定協会発足委員会を開催 事務局を千代田区内神田に移転 会員通信誌「JHIDA-news」1号発行 第5回補聴器技能者講習会へ講師・運営要員等を派遣 補聴器研究開発強化委員会の研究開発小委員会と普及小委員会に参加(テクノエイド協会) 全国補聴器専門店認定協会の事務局を設置 認定補聴器専門店制度の運営業務を受託 	<ul style="list-style-type: none"> 高齢者社会を「音と聞こえ」の面から考えるシンポジウム(全国社会福祉協議会)開催 全国補聴器専門店認定協会設立 「フィッティングフォーラム'94」が開催(鳥取市)
1995年 (平成7年)	<ul style="list-style-type: none"> テクノエイド協会主催補聴器技能者講習会等へ講師・要員派遣 阪神淡路大震災の被災者に補聴器370台、電池1万個贈呈、装用相談実施 	<ul style="list-style-type: none"> 第1回事前実習会を開催 	<ul style="list-style-type: none"> 協会シンボルマークを制定 阪神淡路大震災の被災者支援を実施 「補聴器普及モデル事業」(テクノエイド協会主催)に協力(横浜市・佐原市) JHIDA総合保険制度を開始 第6回補聴器技能者講習会へ講師・運営要員等を派遣 第9回日本耳鼻咽喉科学会専門医講習会に協力(東海支部) 	<ul style="list-style-type: none"> 補聴援助専用電波請願検討会発足 第1回認定補聴器専門店(144店)認定 補聴器技能者講習会申し込みに事前実習会受講証明書が義務付け
1996年 (平成8年)	<ul style="list-style-type: none"> 全国補聴器販売店協会支部講習会等へ講師・要員派遣 補聴器普及を目的としたテレビ番組を放映(「邦子にタッチ」他2本) 全国福祉用具製造事業者協議会に賛助会員として入会 厚生大臣より阪神淡路大震災の救援活動等に対し感謝状を授受 「補聴器のえらび方・入門編」「これで納得、補聴器のかしい使い方」(初版)発行 「補聴器技能者のためのトレーニングマニュアル」翻訳版を出版 	<ul style="list-style-type: none"> 第1回補聴器市場調査アンケートを実施 	<ul style="list-style-type: none"> 「禁忌8項目」を制定 「お客様フィッティング記録カード」の作成 厚生大臣より阪神大震災救援活動等への感謝状を授受 第10回日本耳鼻咽喉科学会専門医講習会に協力(関東支部) 第2回事前実習会を開催(東京・大阪・福岡) 第7回補聴器技能者講習会へ講師・運営要員等を派遣 	
1997年 (平成9年)	<ul style="list-style-type: none"> 日本耳鼻咽喉科学会専門医講習会へ講師・要員派遣 補聴器技能者講習会等へ講師・要員派遣 全国補聴器販売店協会支部講習会等へ講師派遣 Noah委員会設立 	<ul style="list-style-type: none"> 欧州補聴器供給制度視察に参加(テクノエイド協会企画) 創立10周年事業合同委員会を開催 	<ul style="list-style-type: none"> IHS(国際補聴器協会)交流会議出席 第2回補聴器市場調査アンケートを実施 第3回事前実習会を開催(東京・大阪) 第8回補聴器技能者講習会へ講師・運営要員等を派遣 	<ul style="list-style-type: none"> 介護保険法施行



「補聴器技能者のためのトレーニングマニュアル」



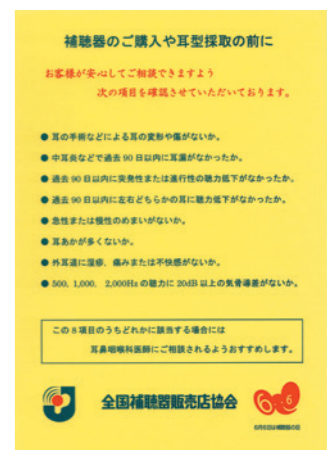
欧州補聴器供給制度視察(テクノエイド協会企画)



全国補聴器販売店協会
シンボルマーク



全国補聴器専門店認定協会設立理事会
平成6年6月2日 東京・八重洲 ホテル国際観光



「禁忌8項目」

年	日本補聴器工業会	日本補聴器工業会・日本補聴器販売店協会 合同事業	日本補聴器販売店協会	関連事項
1998年 (平成10年)	<ul style="list-style-type: none"> 日本耳鼻咽喉科学会専門医講習会へ講師・要員派遣 補聴器技能者講習会等へ講師・要員派遣 全国補聴器販売店協会支部講習会へ講師派遣 	<ul style="list-style-type: none"> 10周年記念式典・祝賀会を開催 	<ul style="list-style-type: none"> 「10周年記念誌」発刊 IHS(国際補聴器協会)の年次総会にて日本の現状を報告 技術委員会を設置 第3回補聴器市場調査アンケートを実施 第4回事前実習会を開催(東京・名古屋・大阪・福岡) 第9回補聴器技能者講習会へ講師・運営要員等を派遣 	<ul style="list-style-type: none"> 言語聴覚士法施行 「医療機関における景品類の提供に関する公正競争規約」制定
1999年 (平成11年)	<ul style="list-style-type: none"> 日本耳鼻咽喉科学会専門医講習会へ講師・要員派遣 補聴器技能者講習会等へ講師・要員派遣 全国補聴器販売店協会支部講習会へ講師派遣 小冊子「補聴器を上手に使うって快適生活」・「補聴器のことは認定補聴器専門店におまかせ」(初版)発行 聞こえをチェックするメロディカード作成 	<ul style="list-style-type: none"> 6月6日を「補聴器の日」に制定 米国補聴器供給制度視察に参加(テクノエイド協会企画) 	<ul style="list-style-type: none"> 第4回補聴器市場調査アンケートを実施 第5回事前実習会を開催(東京・名古屋・大阪・福岡) 「日本の補聴器販売従事者に関する職務調査アンケート」を実施 第1回補聴器技能者基礎講習会へ講師・実習指導員を派遣 	<ul style="list-style-type: none"> 薬事法施行規則一部改正(補聴器販売業届出不要) 認定補聴器技能者養成制度の改定(資格取得まで5年となる) 「補聴器フィッティングの考え方」発刊(小寺一興先生) FM補聴器の修理基準項目採用 第1回補聴器技能者基礎講習会開催(名古屋) テクノエイド協会補聴器部会長就任(部会長:小寺一興先生)
2000年 (平成12年)	<ul style="list-style-type: none"> 日本耳鼻咽喉科学会専門医講習会へ講師・要員派遣 補聴器技能者講習会等へ講師・要員派遣 「ノンリニア増幅」・「デジタル・プログラマブル補聴器」・「パソコンプログラミングに関する技術情報」発行 渉外委員会(販売情報委員会と渉外委員会を統合)設置 「補聴器に関するQ&A」(初版)発行 	<ul style="list-style-type: none"> 6月6日「補聴器の日」第1回イベント開催 マスコット名「ロロくん」発表 	<ul style="list-style-type: none"> 第5回補聴器市場調査アンケートを実施 認定補聴器技能者資格制度へ講師・要員等を派遣(テクノエイド協会) 	<ul style="list-style-type: none"> 補聴器適合検査が医療行為として診療報酬になった 「認定補聴器技能者の会」設立(日本補聴器技能者協会の前身)
2001年 (平成13年)	<ul style="list-style-type: none"> 日本耳鼻咽喉科学会専門医講習会へ講師・要員派遣 認定補聴器技能者養成事業(テクノエイド協会)へ講師・要員派遣 全国補聴器販売店協会支部講習会へ講師派遣 「補聴器の日」を日本記念日協会に登録 「補聴器の日」イベント・「補聴器のある日常」開催 国民生活センターに寄せられた補聴器販売等に関する相談・苦情を分析 	<ul style="list-style-type: none"> 「ロロくん」の意匠登録完了 	<ul style="list-style-type: none"> IHS(国際補聴器協会)との幹部会議開催(神戸) 第6回補聴器市場調査アンケートを実施 認定補聴器技能者資格制度へ講師・要員等を派遣(テクノエイド協会) 常任理事会を設置 組織運営委員会を総務委員会に改称 情報委員会を広報・渉外委員会に改称 国際委員会を設置 	<ul style="list-style-type: none"> 補聴器供給システムの在り方研究会発足(代表:河野康徳先生)
2002年 (平成14年)	<ul style="list-style-type: none"> 日本耳鼻咽喉科学会専門医講習会へ講師・要員派遣 認定補聴器技能者養成事業(テクノエイド協会)へ講師・要員派遣 全国補聴器販売店協会支部講習会へ講師派遣 薬事法対策委員会を設置 「補聴器の日」イベント(糸井重里事務所とのコラボレーション)開催 		<ul style="list-style-type: none"> 有限責任中間法人日本補聴器販売店協会設立 「シルバーサービス展」に出展 「国際福祉機器展」に出展 第1回消費者アンケートを実施 第1回必修指定講習会を開催(大阪) 認定補聴器技能者資格制度の各講習会・部会等へ講師・要員等を派遣(テクノエイド協会) 協会バナーを作成し加盟店へ配布 第2回消費者アンケートを実施 	<ul style="list-style-type: none"> 「補聴器供給システムの在り方に関する研究」1年次報告書発行(テクノエイド協会助成事業) 事前実習会が必修指定講習会Iへ改定(実技3科目)



米国補聴器供給制度視察(テクノエイド協会企画)



補聴器の日
マスコット
「ロロくん」

6月6日は補聴器の日

「6月6日 補聴器の日」制定記者発表会



10周年記念式典・祝賀会



IHS交流会議

年	日本補聴器工業会	日本補聴器工業会・日本補聴器販売店協会 合同事業	日本補聴器販売店協会	関連事項
2003年 (平成15年)	<ul style="list-style-type: none"> 日本耳鼻咽喉科学会専門医講習会へ講師・要員派遣 認定補聴器技能者養成事業(テクノエイド協会)へ講師・要員派遣 日本補聴器販売店協会支部講習会へ講師派遣 有限責任中間法人日本補聴器工業会設立 	<ul style="list-style-type: none"> 「シルバーサービス展」に出展 	<ul style="list-style-type: none"> 憲章の制定、協会バナー、補聴器フィッティングの周知用ポスター、認定補聴器技能者の周知用リーフレットを作成・配布 認定補聴器技能者資格制度の各講習会・部会等へ講師・要員等を派遣(テクノエイド協会) 「補聴器供給システムの在り方に関する研究」のアンケートを受託・実施 第7回補聴器市場調査アンケートを実施 第2回必修指定講習会を開催(大阪・東京・神奈川) 	<ul style="list-style-type: none"> 「補聴器供給システムの在り方に関する研究」2年次報告書発行(テクノエイド協会助成事業)
2004年 (平成16年)	<ul style="list-style-type: none"> 日本耳鼻咽喉科学会専門医講習会へ講師・要員派遣 認定補聴器技能者養成事業(テクノエイド協会)へ講師・要員派遣 日本補聴器販売店協会支部講習会へ講師派遣 小冊子「耳と心にやさしい話」(初版)発行 「耳の日」キャンペーン「補聴器の上手な使い方」ビデオ制作 「補聴器の日」イベント開催 聴力障害者情報文化センター「補聴器相談デー」に相談・展示 新潟県中越地震の被災者支援(補聴器30台、部品・電池進呈)を実施 「最近の難聴者への日常生活関連用具についての紹介」(国際安全協会)に展示・説明 	<ul style="list-style-type: none"> 「シルバーサービス展」に出展 全国中途失聴者・難聴者福祉大会(東京)に出展 「国際福祉機器展」に出展 	<ul style="list-style-type: none"> 新潟県中越地震の被災者支援(無料相談・修理実施)(新潟県部会) 認定補聴器技能者資格制度の各講習会・部会等へ講師・要員等を派遣(テクノエイド協会) 有資格者販売制度に関する署名活動を実施 第3回必修指定講習会Iを開催(大阪) 第1回必修指定講習会IIを開催(名古屋) 	<ul style="list-style-type: none"> 特定商取引法(訪問販売等)の改定 「補聴器供給システムの在り方に関する研究」3年次報告書発行(テクノエイド協会助成事業) 補聴援助電波検討会スタート 補聴器技能者カードを3種類に変更 「補聴器技能者協会の立ち上げ準備会」開催 認定補聴器技能者試験前の講習会として必修指定講習会IIが開始 「補聴器販売の在り方に関する基本方針」決定(日本耳鼻咽喉科学会)
2005年 (平成17年)	<ul style="list-style-type: none"> 日本耳鼻咽喉科学会専門医講習会へ講師・要員派遣 認定補聴器技能者養成事業(テクノエイド協会)へ講師・要員派遣 中途難聴者協会へ講師派遣 日本補聴器販売店協会支部講習会へ講師派遣 「補聴器の日」イベント(駅イベントスペースサンプリング等)を開催 法制倫理委員会を設置 聴力障害者情報文化センター「補聴器相談デー」に相談・展示 	<ul style="list-style-type: none"> 「シルバーサービス展」に出展 「国際福祉機器展」に出展 	<ul style="list-style-type: none"> 厚生労働大臣に補聴器販売有資格者制度の確立を嘆願し約53,000名の署名簿による要望書を提出 日本補聴器販売店協会政治連盟を設立 認定補聴器技能者資格制度の各講習会・部会等へ講師・要員等を派遣(テクノエイド協会) 「補聴器の日」イベントに協力(関東支部) 第4回必修指定講習会Iを開催(大阪) 第2回必修指定講習会IIを開催(名古屋) 第8回補聴器市場調査アンケートを実施 	<ul style="list-style-type: none"> 個人情報保護法施行 薬事法改正(補聴器が管理医療機器としてクラスIIとなる。販売管理者の在籍と販売業の届出が必要となる。) 日本耳鼻咽喉科学会より補聴器相談医の委嘱のガイドライン・カリキュラム公開 「補聴器技能者協会設立検討会」開催 「補聴器相談医制度」開始(日本耳鼻咽喉科学会)
2006年 (平成18年)	<ul style="list-style-type: none"> 日本耳鼻咽喉科学会専門医講習会へ講師・要員派遣 認定補聴器技能者養成事業(テクノエイド協会)へ講師・要員派遣 日本補聴器販売店協会支部講習会へ講師派遣 倫理綱領・企業行動憲章を制定 「補聴器の日」イベント(駅イベントスペースサンプリング等)を開催 	<ul style="list-style-type: none"> 「バリアフリー展」に出展 「国際福祉機器展」に出展 日本補聴器関連団体政治連盟を設立 	<ul style="list-style-type: none"> 認定補聴器技能者資格制度の各講習会・部会等へ講師・要員等を派遣(テクノエイド協会) 第5回必修指定講習会Iを開催(大阪) 第3回必修指定講習会IIを開催(名古屋) 	<ul style="list-style-type: none"> 日本耳鼻咽喉科学会 学術講演会 宿題報告「補聴の進歩と社会的応用」(小寺一興先生) 特定非営利活動法人日本補聴器技能者協会設立 公益通報者保護法施行 障害者自立支援法施行



「補聴器の日」イベントの様子(2002年)



「補聴器の上手な使い方」ビデオ



補聴援助電波検討会



厚生労働大臣に補聴器販売有資格者制度の確立を嘆願し約53,000名の署名簿による要望書を提出

年	日本補聴器工業会	日本補聴器工業会・日本補聴器販売店協会 合同事業	日本補聴器販売店協会	関連事項
2006年 (平成18年)	<ul style="list-style-type: none"> ・NPOまちづくり福祉推進ネットへ講師派遣 ・「補聴器用語集」を発行 ・補聴器相談医認定講習会(大阪)に協力 ・「補聴器品質確保に関するガイドライン」を制定 		<ul style="list-style-type: none"> ・各支部県部会にて「補聴器の日」イベントを開催 ・第9回補聴器市場調査アンケートを実施 ・自由民主党主催の「補聴器勉強会」へ講師派遣 	<ul style="list-style-type: none"> ・「補聴器については個々の使用者ごとに調整が必要であり、販売に際しては専門的知識を必要とする旨の通知」が発出(厚生労働省) ・テクノエイド協会ホームページで認定補聴器技能者名簿が公開
2007年 (平成19年)	<ul style="list-style-type: none"> ・日本耳鼻咽喉科学会専門医講習会へ講師・要員派遣 ・認定補聴器技能者養成事業(テクノエイド協会)へ講師・要員派遣 ・日本補聴器販売店協会支部講習会へ講師派遣 ・「補聴器相談医委嘱のための講習会」(東京)に協力 ・「法制倫理審査会規則」(のちに「企業倫理審査会規則」に変更)を制定 ・「補聴器の日」イベント(東京駅、駅中イベント)を開催 ・「補聴器製造販売業プロモーションコード」を改訂 ・ウェアラブル環境情報ネット定例会に講師派遣 ・「補聴器相談医委嘱のための講習会」(大阪)に協力 	<ul style="list-style-type: none"> ・「バリアフリー展」に出展 ・「国際福祉機器展」に出展 ・「補聴器の適正広告・表示ガイドライン」を制定 	<ul style="list-style-type: none"> ・認定補聴器専門店の認定業務をテクノエイド協会へ移管 ・認定補聴器技能者資格制度の各講習会・部会等へ講師・要員等を派遣(テクノエイド協会) ・認定補聴器専門店制度へ調査員・要員等を派遣(テクノエイド協会) ・各支部県部会にて「補聴器の日」イベントを開催 ・第9回補聴器市場調査アンケートを実施 	<ul style="list-style-type: none"> ・「補聴器供給システムの在り方に関する研究Ⅱ」報告書作成(代表:河野康徳先生) ・「通信販売の補聴器等の安全性や補聴効果—販売サービスに関する調査も含めて—」発表。問題点の改善に向けて、業界と行政に要望書が提出される(独立行政法人国民生活センター) ・必修指定講習会I・IIの実施運営業務が日本補聴器技能者協会へ移管
2008年 (平成20年)	<ul style="list-style-type: none"> ・日本耳鼻咽喉科学会専門医講習会他へ講師・要員派遣 ・認定補聴器技能者養成事業(テクノエイド協会)へ講師・要員派遣 ・日本補聴器販売店協会支部講習会へ講師派遣 ・「補聴器相談医委嘱のための講習会」(東京)に協力 ・「企業倫理とプロモーションコードの講習会」開催 ・「栃木県健康生きがいづくり協議会」へ講師派遣 ・医薬品医療機器総合機構・補聴器説明会へ講師派遣 ・「日本補聴器工業会からのお知らせ Vol. 1」(補聴器の適正な販売を推進するために)発行 ・「補聴器の日」イベント(「耳で感じるコンサート」など)開催 ・プレスセミナー「加齢と聴力の低下、その特徴と対応」開催(講師・杉内智子先生) ・「補聴器相談医委嘱のための講習会」(大阪)に協力 ・ACIC開設記念フォーラムに講師派遣 	<ul style="list-style-type: none"> ・「医療機関内における補聴器外来・相談への技能情報提供に関する業界ガイドライン」作成(業界三団体) ・「バリアフリー展」に出展 ・「補聴器・両耳装用研究会」業界三団体で発足 ・「オヤノコトエキスポ」に業界三団体で出展 ・「国際福祉機器展」に業界三団体で出展 ・創立20周年記念事業「NHK市民公開シンポジウム あなたの聞こえは大丈夫?～難聴の早期発見と対処を考える～」を開催 	<ul style="list-style-type: none"> ・「補聴器品質確保に関するガイドライン」を制定 ・国会議員への補聴器勉強会を開催(補聴器未使用での逸失利益、通販等の調査結果について) ・事務局を所在地へ移転(千代田区内神田2-11-1) ・認定補聴器技能者資格制度の各講習会・部会等へ講師・要員等を派遣(テクノエイド協会) ・認定補聴器専門店制度へ調査員・要員等を派遣(テクノエイド協会) ・日本耳鼻咽喉科学会地方部会開催の「耳の日相談会」に協力(各支部県部会) ・各支部県部会にて「補聴器の日」イベントを開催 ・「聴覚障害者の情報コミュニケーション支援の在り方研究会」(厚生労働省)にて補聴の現状・課題等を報告 ・「聴覚補償リハビリテーションの研究」に講師派遣(全難聴) ・補装具の価格等に係る実態調査を実施 	
2009年 (平成21年)	<ul style="list-style-type: none"> ・日本耳鼻咽喉科学会専門医講習会他へ講師・要員派遣 ・認定補聴器技能者養成事業(テクノエイド協会)へ講師・要員派遣 ・補聴器適合判定医師研修会へ講師・要員派遣 ・日本補聴器販売店協会支部講習会へ講師派遣 ・「企業倫理とプロモーションコードの講習会」開催 ・「補聴器の日」イベント(「視聴者参加イベント」など)開催 	<ul style="list-style-type: none"> ・「バリアフリー展」に出展 ・「オヤノコトエキスポ」に出展 ・「国際福祉機器展」に業界三団体で出展 ・両耳装用検討会を開催 ・「補聴器の適正広告・表示ガイドライン集」発行 	<ul style="list-style-type: none"> ・一般社団法人日本補聴器販売店協会へ名称変更 ・補聴器販売状況調査を実施 ・認定補聴器技能者資格制度の各講習会・部会等へ講師・要員等を派遣(テクノエイド協会) ・認定補聴器専門店制度へ調査員・要員等を派遣(テクノエイド協会) 	<ul style="list-style-type: none"> ・補聴器の適正供給の仕組みづくりが発足・有資格者による販売体制の検討を開始(テクノエイド協会、業界三団体)



「補聴器の日」イベント(東京駅)2007年



2008年12月6日 千代田放送会館
(東京都千代田区)

NHK市民公開シンポジウム(2008年)



「バリアフリー展」に出展(2008年)



「オヤノコトエキスポ」に出展(2009年)

年	日本補聴器工業会	日本補聴器工業会・日本補聴器販売店協会 合同事業	日本補聴器販売店協会	関連事項
2009年 (平成21年)	<ul style="list-style-type: none"> 「一般社団法人日本補聴器工業会」へ名称変更 在宅介護支援センター(千葉県松戸市)講師派遣 「補聴器相談医委嘱のための講習会」(大阪)に協力 プレスセミナー「聞こえの痛みを和らげる社会」開催(講師・大沼直紀先生) 		<ul style="list-style-type: none"> 日本耳鼻咽喉科学会地方部会開催の「耳の日相談会」に協力(各支部県部会) 各支部県部会にて「補聴器の日」イベントを開催 第10回補聴器市場調査アンケートを実施 	
2010年 (平成22年)	<ul style="list-style-type: none"> 日本耳鼻咽喉科学会専門医講習会他へ講師・要員派遣 認定補聴器技能者養成事業(テクノエイド協会)へ講師・要員派遣 「補聴器相談医委嘱のための講習会」(東京)に協力 FM補聴援助電波検討委員会発足 「企業倫理と補聴器の適正広告等講習会」開催 「補聴器の日」イベント(「補聴器がよくわかるイベント」など)開催 蔵前地域包括支援センター(東京都台東区)へ講師派遣 プレスセミナー「超高齢社会における聴覚障害とその対応」開催(講師・小川郁先生) 	<ul style="list-style-type: none"> 「オヤノコトエキスポ」に出展 補聴器両耳装用研究会「第一年度調査研究報告書」発行 	<ul style="list-style-type: none"> 「補聴器の広告・表示事例集」(補聴器の適正広告・表示ガイドライン別冊)策定 「補聴器がよくわかるイベント」開催(福岡) 「デジタル補聴器延長保証制度」事業開始 両耳装用に関する顧客アンケート実施 韓国補聴器協会と情報交換会を開催 認定補聴器技能者資格制度の各講習会・部会等へ講師・要員等を派遣(テクノエイド協会) 認定補聴器専門店制度へ調査員・要員等を派遣(テクノエイド協会) 	<ul style="list-style-type: none"> 「認定補聴器技能者養成要綱」(テクノエイド協会)制定(e-ラーニングの導入、養成4年での認定取得可能へ変更) 「補聴器適合検査の指針(2010)」を公表(日本聴覚医学会) 「販売時における補聴器フィッティング」を制定(日本補聴器技能者協会)
2011年 (平成23年)	<ul style="list-style-type: none"> 日本耳鼻咽喉科学会専門医講習会他へ講師・要員派遣 認定補聴器技能者養成事業(テクノエイド協会)へ講師・要員派遣 補聴器適合判定医師研修会へ講師・要員派遣 日本補聴器販売店協会支部講習会へ講師派遣 「補聴器相談医委嘱のための講習会」(東京)に協力 国際耳鼻咽喉科学振興会から感謝状授受 東日本大震災の被災者支援実施(補聴器1,074台、部品・電池進呈) 「日本補聴器工業会からのお知らせVol. 2(国民生活センターに寄せられた補聴器への苦情と相談について)」発行 「災害緊急支援活動指針」制定 プレスセミナー「聞こえと補聴器に対する疑問」開催(講師・岡本牧人先生) 	<ul style="list-style-type: none"> 「オヤノコトエキスポ」に出展 両耳装用補聴器の供給に関するガイドライン検討会「第二年度調査検討報告書」発行 	<ul style="list-style-type: none"> 医機連経由で厚生労働省への薬事法改正に向けた医療機器業界からの要望書において一定水準以上の補聴器適応技能を有する者の在籍義務化を要望 東日本大震災の被災者支援(無料相談・修理、電池寄付)及び義援金活動を実施 認定補聴器技能者資格制度の各講習会・部会等へ講師・要員等を派遣(テクノエイド協会) 認定補聴器専門店制度へ調査員・要員等を派遣(テクノエイド協会) 補装具の価格等に係る実態調査を実施 「両耳装用補聴器の供給に関するガイドライン検討会」のアンケート調査を実施 第11回補聴器市場調査アンケートを実施 	<ul style="list-style-type: none"> 「補聴器適正供給システムの構築プロジェクト」発足(テクノエイド協会、業界三団体)
2012年 (平成24年)	<ul style="list-style-type: none"> 日本耳鼻咽喉科学会専門医講習会他へ講師・要員派遣 認定補聴器技能者養成事業(テクノエイド協会)へ講師・要員派遣 補聴器適合判定医師研修会へ講師・要員派遣 「補聴器相談医委嘱のための講習会」(東京)に協力 	<ul style="list-style-type: none"> 「バリアフリー展」に出展 「補聴器の日」イベント・第1回「補聴器ライフスタイルフォーラム」を開催 	<ul style="list-style-type: none"> 両耳装用に関するアンケート調査報告書完成 日本耳鼻咽喉科学会発行の「補聴器適合に関する報告書」の周知活動の実施 認定補聴器技能者資格制度の各講習会・部会等へ講師・要員等を派遣(テクノエイド協会) 認定補聴器専門店制度へ調査員・要員等を派遣(テクノエイド協会) 第1回「6月6日は補聴器の日」プレゼントキャンペーンを実施 	<ul style="list-style-type: none"> 「補聴器適合に関する診療情報提供書」及び「補聴器適合に関する報告書」制定(日本耳鼻咽喉科学会)



「補聴器がよくわかるイベント」開催(福岡)



東日本大震災で被災したリオネット補聴器センター石巻店



厚生労働大臣より東日本大震災の支援活動に対して感謝状を授受



年	日本補聴器工業会	日本補聴器工業会・日本補聴器販売店協会 合同事業	日本補聴器販売店協会	関連事項
2012年 (平成24年)	<ul style="list-style-type: none"> 日本における難聴や補聴器装用の実態調査「JapanTrak2012」実施(後援:テクノエイド協会、協力:EHIMA) 		<ul style="list-style-type: none"> 「補聴器適合に関する診療情報提供書」及び「補聴器適合に関する報告書」の周知活動と講習会を実施 会員証をリニューアル 	
2013年 (平成25年)	<ul style="list-style-type: none"> 日本耳鼻咽喉科学会専門医講習会他へ講師・要員派遣 認定補聴器技能者養成事業(テクノエイド協会)へ講師・要員派遣 補聴器適合判定医師研修会へ講師・要員派遣 「補聴器相談医委嘱のための講習会」(東京)に協力 厚生労働大臣から東日本大震災における被災者支援活動に対して感謝状授受 日本早期認知症学会大会に講師派遣 「補聴器の日」イベント・第2回「補聴器ライフスタイルフォーラム」など開催 夏季デフリンピック競技大会に寄付 経営者向け「競争法コンプライアンスセミナー」開催 	<ul style="list-style-type: none"> 両耳装用補聴器の供給に関するガイドライン検討会「第三年度報告書」発行。日本聴覚医学会補聴研究会にて「両耳装用補聴器の供給に関する検討会報告」として発表 	<ul style="list-style-type: none"> 厚生労働大臣より東日本大震災の支援活動に対して感謝状の授受 創立25周年記念事業として協会バナーを加盟店に配布 「JAPAN補聴器フォーラム2013」を開催(東京・秋葉原) 第1回「子供たちが考える・補聴器の未来図」絵画作品展・第1回「音を感じる写真コンテスト」開催 情報アクセシビリティフォーラムに出展 認定補聴器技能者資格制度の各講習会・部会等へ講師・要員等を派遣(テクノエイド協会) 認定補聴器専門店制度へ調査員・要員等を派遣(テクノエイド協会) 第2回「6月6日は補聴器の日」プレゼントキャンペーンを実施 「補聴器の日」イベント「ライフスタイルフォーラム」に協力(日本補聴器工業会) 第12回補聴器市場調査アンケートを実施 加盟店名簿をリニューアル 	<ul style="list-style-type: none"> 「販売店における補聴器効果の確認法」制定(日本補聴器技能者協会)
2014年 (平成26年)	<ul style="list-style-type: none"> 日本耳鼻咽喉科学会専門医講習会他へ講師・要員派遣 認定補聴器技能者養成事業(テクノエイド協会)へ講師・要員派遣 補聴器適合判定医師研修会へ講師・要員派遣 「補聴器相談医委嘱のための講習会」(東京)に協力 国際耳鼻咽喉科学振興会から感謝状授受 薬事法対策委員会を技術委員会に編入 「国際内耳ワークショップ2014京都」に寄付 「医薬品医療機器等法に関する説明会」開催 「補聴器の日」イベント・第3回「補聴器ライフスタイルフォーラム」など開催 「日本補聴器工業会からのお知らせ Vol. 3」(国民生活センターから要望された「補聴器への苦情/不満と相談」について)発行 国民生活センターからの要望書に対して回答 		<ul style="list-style-type: none"> 「ユニットケア研修フォーラム2014」出展(横浜) 社会貢献事業として「ほじょ犬募金活動」を開始 在宅ケアを支える診療所・市民全国ネットワーク主催「第20回記念大会 全国の集い」に出展(岡山) 認定補聴器技能者資格制度の各講習会・部会等へ講師・要員等を派遣(テクノエイド協会) 認定補聴器専門店制度へ調査員・要員等を派遣(テクノエイド協会) 第3回「6月6日は補聴器の日」プレゼントキャンペーンを実施 補助犬募金活動を開始 「補聴器の日」イベント「ライフスタイルフォーラム」に協力(日本補聴器工業会) 補装具の価格等に係る実態調査を実施 	<ul style="list-style-type: none"> 「きこえのQOL促進プロジェクト」開催(テクノエイド協会、業界三団体) 「「高い」、「期待したほど聞こえない」、あなたの補聴器選び大丈夫ですか?」発表。補聴器への苦情相談の増加。消費者への注意喚起と事業者への要望がされた(独立行政法人国民生活センター)
2015年 (平成27年)	<ul style="list-style-type: none"> 日本耳鼻咽喉科学会専門医講習会他へ講師・要員派遣 認定補聴器技能者養成事業(テクノエイド協会)へ講師・要員派遣 補聴器適合判定医師研修会へ講師・要員派遣 		<ul style="list-style-type: none"> 「ユニットケア研修フォーラム2015」出展(横浜) 「JAPAN補聴器フォーラム2015」を開催(東京・浜松町) 「補聴器販売業プロモーションコード」制定 「補聴器適正販売ガイドライン」制定 	<ul style="list-style-type: none"> 日本補聴器技能者協会創立10周年記念講演会開催 「認知症施策推進総合戦略(新オレンジプラン)」策定 ※難聴が認知症の危険因子と認定



「日本補聴器工業会からのお知らせ」



大規模市場調査「JapanTrak 2012」



「JAPAN補聴器フォーラム2013」



第1回「子供たちが考える・補聴器の未来図」絵画作品展

年	日本補聴器工業会	日本補聴器工業会・日本補聴器販売店協会 合同事業	日本補聴器販売店協会	関連事項
2015年 (平成27年)	<ul style="list-style-type: none"> 「補聴器相談医委嘱のための講習会」(東京)に協力 健康寿命ドットコム(NPO法人カルショック)「聴こえ」のコンテンツに参加 日本における難聴や補聴器装用の実情調査「JapanTrak2015」実施(協力:テクノエイド協会、EHIMA) 		<ul style="list-style-type: none"> 「競争法コンプライアンス規程」制定 第4回「6月6日は補聴器の日」プレゼントキャンペーンを実施 認定補聴器技能者資格制度の各講習会・部会等へ講師・要員等を派遣(テクノエイド協会) 認定補聴器専門店制度へ調査員・要員等を派遣(テクノエイド協会) 第13回補聴器市場調査アンケートを実施 	
2016年 (平成28年)	<ul style="list-style-type: none"> 日本耳鼻咽喉科学会専門医講習会他へ講師・要員派遣 認定補聴器技能者養成事業(テクノエイド協会)へ講師・要員派遣 補聴器適合判定医師研修会へ講師・要員派遣 「補聴器相談医委嘱のための講習会」(東京)に協力 東京医科大学・補聴器勉強会へ講師派遣 日補工HPリニューアル(「補聴器ライフを楽しもう」) 「平成28年熊本地震」の補聴器装用者に各社独自で支援 		<ul style="list-style-type: none"> 平成28年度厚生労働省委託事業「補聴器の安全で効果的な使用に資するマニュアル作成及び普及啓発事業」、「補聴器販売者技能向上研修事業」を受託実施 第5回「6月6日は補聴器の日」プレゼントキャンペーンを実施 認定補聴器技能者資格制度の各講習会・部会等へ講師・要員等を派遣(テクノエイド協会) 認定補聴器専門店制度へ調査員・要員等を派遣(テクノエイド協会) 補聴器電池取り扱い事業を開始 	<ul style="list-style-type: none"> 「補聴器販売に関連する医療類似行為に関する見解」を発表(日本聴覚医学会) テクノエイド協会補聴器協議会会長就任(会長:原晃先生)
2017年 (平成29年)	<ul style="list-style-type: none"> 日本耳鼻咽喉科学会専門医講習会他へ講師・要員派遣 認定補聴器技能者養成事業(テクノエイド協会)へ講師・要員派遣 補聴器適合判定医師研修会へ講師・要員派遣 「「難聴と認知症・うつ病」に関する国際シンポジウム」共催(主催:日本耳鼻咽喉科学会) 「補聴器相談医委嘱のための講習会」(東京)に協力 「デフ・パペットシアターひとみ」(現代人形劇センター)公演に協賛 夏季デフリンピック競技大会に寄付 「日本補聴器工業会からのお知らせVol. 4」(補聴器の適正な販売を推進するために)発行 	<ul style="list-style-type: none"> 「保存版補聴器お役立ちブック」(初版)発行 	<ul style="list-style-type: none"> 平成29年度厚生労働省委託事業「補聴器販売者の技能向上研修等事業」を受託実施 「企業行動憲章」を制定 「禁忌8項目」を改訂 第6回「6月6日は補聴器の日」プレゼントキャンペーンを実施 認定補聴器技能者資格制度の各講習会・部会等へ講師・要員等を派遣(テクノエイド協会) 認定補聴器専門店制度へ調査員・要員等を派遣(テクノエイド協会) ホームページのリニューアル 第14回補聴器市場調査アンケートを実施 補装具の価格等に係る実態調査を実施 	<ul style="list-style-type: none"> 「補聴器のフィッティングと適用の考え方」発刊(小寺一興先生)
2018年 (平成30年)	<ul style="list-style-type: none"> 日本耳鼻咽喉科学会専門医講習会他へ講師・要員派遣 認定補聴器技能者養成事業(テクノエイド協会)へ講師・要員派遣 「補聴器相談医委嘱のための講習会」(東京)に協力 「補聴器PR動画」制作 補聴器適合判定医師研修会へ講師・要員派遣 日本における難聴や補聴器装用の実情調査「JapanTrak2018」実施(協力:テクノエイド協会、EHIMA) 		<ul style="list-style-type: none"> 平成30年度厚生労働省委託事業「補聴器販売者の技能向上研修等事業」を受託実施 「JAPAN補聴器フォーラム2018」開催(東京・秋葉原) 第7回「6月6日は補聴器の日」プレゼントキャンペーンを実施 認定補聴器技能者資格制度の各講習会・部会等へ講師・要員等を派遣(テクノエイド協会) 認定補聴器専門店制度へ調査員・要員等を派遣(テクノエイド協会) 	<ul style="list-style-type: none"> 補装具費改定 ※補装具費の算定等に関する基準に、補聴器の装用に関し、言語聴覚士と認定補聴器技能者による調整が必要な場合は2,000円を加算することに改定



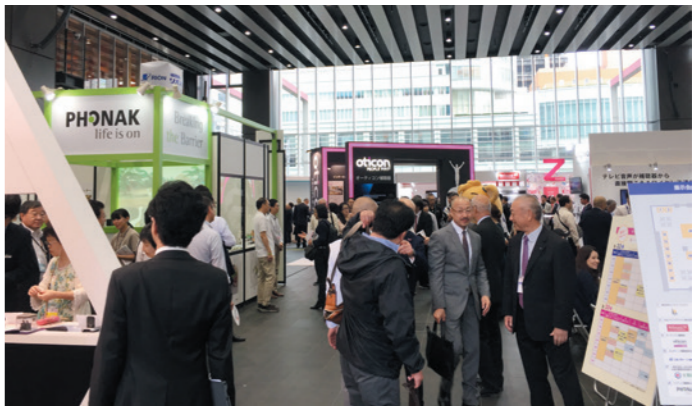
「難聴と認知症・うつ病」に関する国際シンポジウム



「保存版 補聴器お役立ちブック」



「補聴器の安全で効果的な使用に資するマニュアル」



「JAPAN補聴器フォーラム2018」開催(東京・秋葉原)

創立30周年
記念誌

補聴器
業界の
歩み

2

日本の補聴器の歴史

日本における補聴器開発の歴史

年	日本の補聴器の歴史	関連事項	図版等
1813年 (文化10年)	・司馬江漢がオランダ人に学び、トランペット型の耳鏡を製作		
1869年 (明治2年)		・福沢諭吉が欧米視察「西洋事情」でパリ聾学校の教育を紹介	
1878年 (明治11年)		・京都盲聾院が設立され、翌年府立盲聾院となる (日本におけるろう教育の幕開け)	
1893年 (明治26年)		・日本耳鼻咽喉科学会が発足	
1919年 (大正8年)		・生活改造展覧會に補聴器を出品(吉田勝恵氏)	
1920年 (大正9年)		・A.K.Reischauer氏(米国)が難聴教室を開設 (後の私立日本聾話学校)	
1922年 (大正11年)	・蓮実形補聴器を販売開始 (いわしや医科器械永島商店社)		
1923年 (大正12年)		・健康保険法が公布	
1924年 (大正13年)	・吉田勝恵商店がカーボン型補聴器を試作		
1925年 (大正14年)		・第1回日本聾啞教育総会が大分で開催 ・日本聾話学校で米国の集団電気補聴器により聴能訓練開始	
1927年 (昭和2年)			
1932年 (昭和7年)	・加藤亨(大阪聾口話学校長、元大阪大学耳鼻科教授)がカーボンマイクロホンを使用しリッカーホン補聴器を製作	・東京・小石川の礪川尋常小学校に難聴学級が開設	
1934年 (昭和9年)	・星野行恒(京都大学)が歯牙伝導によるホシノホン補聴器を製作		
1946年 (昭和21年)	・真空管搭載補聴器を発売(東邦理研社)		
1947年 (昭和22年)		・児童福祉法が施行	
1948年 (昭和23年)	・ミニチュア管使用のクリスタルイヤホン付き携帯用補聴器を発売(小林理研製作所社) ・集団補聴器を発売(小林理研製作所社)	・オーディオメータ試作第1号(小林理研製作所社)	
1949年 (昭和24年)	・風間式電気補聴器を発売 ・サブミニチュア管を使用し、本体と電池が一体化した小型補聴器を発売(東邦理研社)	・身体障害者福祉法が施行 ・オーディオメータを発売(永島医科器械社)	
1950年 (昭和25年)	・クリスタルイヤホン使用の補聴器を発売(小林理研製作所社)	・標準型オーディオメータを発売(日本光電工業社) ・聴力計を発売(東和音響社) ・補聴器が補装具の指定品目となる	
1951年 (昭和26年)	・ミニチュア真空管使用の携帯用補聴器を発売(日本光電工業社)	・第1回難聴研究会(後の日本オーディオロジー学会)が発足	



帝國發明協會より吉田勝恵氏に贈られた、生活改造展覧會での記念狀



真空管搭載補聴器(東邦理研社)



1948年に発売された日本初の量産型補聴器<H-501>
(小林理研製作所社)



歯牙伝導によるホシノホン補聴器

日本における補聴器開発の歴史

年	日本の補聴器の歴史	関連事項	図版等
1952年 (昭和27年)		<ul style="list-style-type: none"> 標準オーディオメータを発売 (小林理研製作所社、ナイツ社) 	
1953年 (昭和28年)	<ul style="list-style-type: none"> サブミニチュア管補聴器を発売(小林理研製作所社) 	<ul style="list-style-type: none"> 泉吉美(山口聾学校長)が足聴器を試作 	
1954年 (昭和29年)	<ul style="list-style-type: none"> ワイヤレス集団補聴器を発売(日本光電工業社) 		
1955年 (昭和30年)	<ul style="list-style-type: none"> 補聴器を発売(東京通信工業社) トランジスタ補聴器を発売(東邦理研社) 	<ul style="list-style-type: none"> 集団用選別オーディオメータが発売、主として騒音難聴に使用 (小林理研製作所社、永島医科器械社ほか) オーディオメータを発売(岩崎通信機社) 	
1956年 (昭和31年)		<ul style="list-style-type: none"> オーディオメータの日本工業規格 JIS T 1201 が制定 日本オーディオロジー学会が発足 恩地豊考案のARメータ(耳小骨筋反射測定器)が商品化(永島医科器械社) 日本耳鼻咽喉科学会と厚生省の共催で第1回“耳の日”が実施 	
1957年 (昭和32年)		<ul style="list-style-type: none"> 国立ろうあ者更生指導所が東京に設置 鈴木篤郎先生が重ね合せ法による聴性誘発反応を臨床に応用 日本オーディオロジー学会が語音聴力検査用57式語表を作成 	
1958年 (昭和33年)		<ul style="list-style-type: none"> 芦田均首相が補聴器を活用 	
1959年 (昭和34年)	<ul style="list-style-type: none"> 箱型補聴器を発売(松下通信工業社) 		
1960年 (昭和35年)	<ul style="list-style-type: none"> メガネ型補聴器を発売 (コルチトーン補聴器社、リオン社) 	<ul style="list-style-type: none"> 鈴木篤郎先生が条件詮索反応聴力検査(COR)を考案・発売(永島医科器械社) ベケシー型オーディオメータが発売 (リオン社、永島医科器械社) 半導体をオーディオメータに利用(国内各社) NHKテレビでろう学校の放送が開始 	
1961年 (昭和36年)	<ul style="list-style-type: none"> 自動音声コンプレッション回路(ARC)補聴器を発売 (リオン社) 自動音量調整(AGC)回路付RC補聴器を発売 (松下通信工業社) 耳かけ型補聴器を発売(コルチトーン補聴器社) 	<ul style="list-style-type: none"> 3歳児検診に聴力検査が加えられる 薬事法が施行 	
1963年 (昭和38年)		<ul style="list-style-type: none"> オーディオメータのJIS規格が改正 吉田茂首相が補聴器を活用 	
1965年 (昭和40年)	<ul style="list-style-type: none"> ICを用いた補聴器を発売(コルチトーン補聴器社) 		
1966年 (昭和41年)		<ul style="list-style-type: none"> 第11回国際オーディオロジー学会が京都で開催 	
1967年 (昭和42年)	<ul style="list-style-type: none"> セラミックマイクロホンを用いた補聴器を開発 (リオン社) 	<ul style="list-style-type: none"> 日本オーディオロジー学会が語音聴力検査用67式語表を作成 	
1969年 (昭和44年)		<ul style="list-style-type: none"> 沖縄の風疹障害児が問題となる 新生児聴覚検査器ネオメータを発売 (永島医科器械社) 	



リオン携帯用補聴器<H507>(小林理研製作所社)



リオン電気補聴器<H520>(小林理研製作所社)



ヘアピン型補聴器<TH601>(コルチトーン補聴器社)



トランジスター補聴器<TE-2>(東京通信工業社)

日本における補聴器開発の歴史

年	日本の補聴器の歴史	関連事項	図版等
1970年 (昭和45年)		<ul style="list-style-type: none"> Master Auditory Trainer を検査・訓練用に開発 (リオン社) 今井秀雄先生他がワイヤレスマイクロホンとFM受信機のシステムをFM受信機の教育に用いることを提唱 	 <p>トランジスタ補聴器<トリオ20T> (日本光電工業社)</p>
1971年 (昭和46年)	<ul style="list-style-type: none"> 挿耳型補聴器を発売 (コルチトーン補聴器社) 	<ul style="list-style-type: none"> 文部省が国立特殊教育総合研究所を神奈川県久里浜に設立 	 <p>ポケット型トランジスタ補聴器 <CB-801> (松下通信工業社)</p>
1972年 (昭和47年)		<ul style="list-style-type: none"> 第1回補聴器勉強会 (神戸) 開催 	
1973年 (昭和48年)	<ul style="list-style-type: none"> ADSS (Audio clipping filter 方式) の補聴器を発売 (リオン社) 		
1974年 (昭和49年)		<ul style="list-style-type: none"> 診断用全自動オーディオメータを発売 (ダナジャパン社) 	
1975年 (昭和50年)		<ul style="list-style-type: none"> ERA 専用音刺激装置発売 (リオン社、ダナジャパン社、三栄測器社) 聴覚障害児教育国際会議が東京で開催 	
1976年 (昭和51年)		<ul style="list-style-type: none"> 補聴器のJIS規格が改正 SPLヒヤリングメータの考案と試作 (大和田健次郎先生・ダナジャパン社) 	
1978年 (昭和53年)		<ul style="list-style-type: none"> 小型イヤホン使用によるSPL補聴器用聴力測定器を発売 (コルチトーン補聴器社) 日本オーディオロジー学会内に補聴研究会が発足 	
1980年 (昭和55年)	<ul style="list-style-type: none"> 骨導式メガネ型補聴器を発売 (松下通信工業社) 	<ul style="list-style-type: none"> 日本最初の単電極人工内耳埋込術が実施 	 <p>挿耳型補聴器<TE-501> (ソニー社)</p>
1981年 (昭和56年)	<ul style="list-style-type: none"> 自動騒音抑制式補聴器を発売 (リオン社) 	<ul style="list-style-type: none"> 補聴器のJIS規格が改正 	 <p>メガネ型補聴器<HE-71> (リオン社)</p>
1983年 (昭和58年)		<ul style="list-style-type: none"> 通産省工業技術院より開発委託を受けた埋込型人工中耳を完成 (リオン社、三洋電機社) オーディオメータのJIS規格が改正 厚生省主催の補聴器等適合判定医師研修会が開始 	
1984年 (昭和59年)	<ul style="list-style-type: none"> オーダーメイド・カスタム補聴器を発売 (リオン社) 		
1985年 (昭和60年)		<ul style="list-style-type: none"> 日本での多チャンネル人工内耳の臨床応用が開始 	
1986年 (昭和61年)	<ul style="list-style-type: none"> 防水タイプ耳かけ形補聴器を発売 (リオン社) 		
1990年 (平成2年)		<ul style="list-style-type: none"> 挿耳型が身体障害者・児童福祉法で認められた 	
1991年 (平成3年)	<ul style="list-style-type: none"> デジタル補聴器を発売 (リオン社) 		 <p>1991年に発売された世界初のデジタル補聴器<HD-10> (リオン社)</p>
1999年 (平成11年)	<ul style="list-style-type: none"> 介護補聴器を発売 (リオン社) 		
2000年 (平成12年)			
2003年 (平成15年)	<ul style="list-style-type: none"> オープン型補聴器を発売 (各社) 		 <p>1996年に開発されたメガネのツルに装着する補聴器<TH-1EX> (コルチトーン補聴器社)</p>

日本における補聴器開発の歴史

年	日本の補聴器の歴史	関連事項
2005年 (平成17年)	・防水型オーダーメイド補聴器を発売(リオン社)	・「人工内耳の日」を9月9日に人工内耳友の会が設定
2006年 (平成18年)	・RIC型補聴器が発売(各社)	・補装具の支給が「現物給付」から「補装具費」になった
2009年 (平成21年)	・デジタルポケット型補聴器を発売(パナソニック補聴器社)	・障害者自立支援法が障害者総合支援法に改正
2010年 (平成22年)		
2015年 (平成27年)	・Bluetooth・DECT対応ポケット型補聴器を発売(パナソニック補聴器社)	
2016年 (平成28年)	・充電式耳あな型補聴器を発売(パナソニック補聴器社)	
2017年 (平成29年)	・軟骨伝導補聴器を発売(リオン社) ・非接触充電式耳かけ型補聴器を発売(パナソニック補聴器社)	



2005年に発売された世界初の防水型オーダーメイド補聴器
＜HI-G4WE＞(リオン社)



2009年に発売されたRICタイプ補聴器、コバルトシリーズ
(コルチトーン補聴器社)

年代	箱型	眼鏡型	耳掛け型	挿耳型
昭和十年	二百円	二百円	二百円	二百円
昭和二十年	三百円	三百円	三百円	三百円
昭和三十年	四百円	四百円	四百円	四百円
昭和四十年	五千円	五千円	五千円	五千円
昭和五十年	六万円	六万円	六万円	六万円
昭和六十年	七万円	七万円	七万円	七万円
昭和七十年	八万円	八万円	八万円	八万円
昭和八十年	九万円	九万円	九万円	九万円
昭和九十年	十万円	十万円	十万円	十万円
平成元年	十二万円	十二万円	十二万円	十二万円
平成十年	十五万円	十五万円	十五万円	十五万円
平成二十年	二十万円	二十万円	二十万円	二十万円
平成三十年	三十万円	三十万円	三十万円	三十万円
平成四十年	四十万円	四十万円	四十万円	四十万円
平成五十年	五十万円	五十万円	五十万円	五十万円
平成六十年	六十万円	六十万円	六十万円	六十万円
平成七十年	七十万円	七十万円	七十万円	七十万円
平成八十年	八十万円	八十万円	八十万円	八十万円
平成九十年	九十万円	九十万円	九十万円	九十万円
令和元年	百円	百円	百円	百円

補聴器値段のうつつりかわり(『週刊朝日』値段の風俗史より)



2009年に発売されたデジタルポケット型補聴器＜WH-103JJ＞
(パナソニック補聴器社)



2015年に発売されたBluetooth・DECT対応ポケット型補聴器
＜WH-J25D＞(パナソニック補聴器社)



2017年に発売された世界初の軟骨伝導補聴器
＜HB-J1CC＞(リオン社)

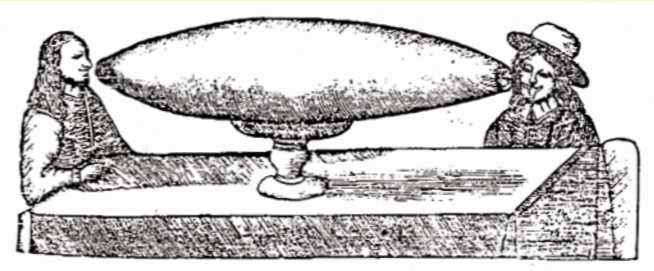
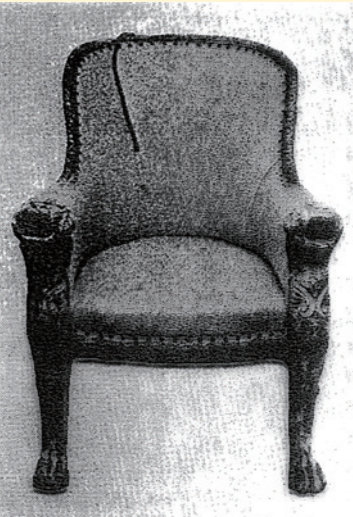
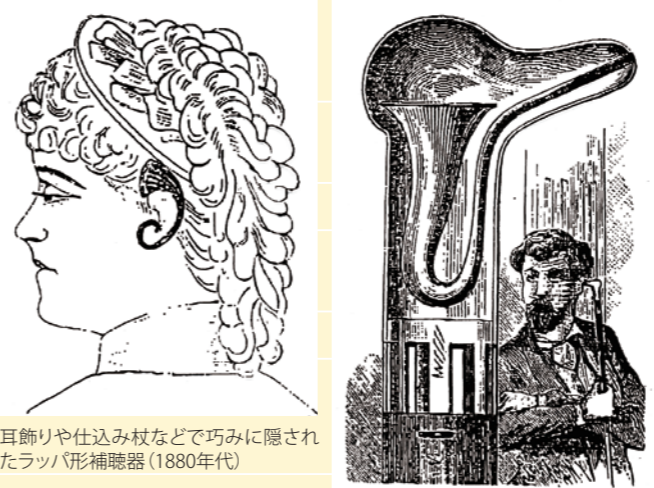


創立30周年
記念誌

補聴器
業界の
歩み

3

海外の補聴器の歴史

海外における補聴器開発の歴史

年	海外の補聴器の歴史	関連事項	図版等
1646年	・数学者・哲学者 A. Kircher (ドイツ)、トランペット形補聴器を製作。聴音器の実験を重ねる		 <p>音響物理学の教科書に図示された初期の補聴器 (17世紀)</p>
1640年		・豚の膀胱で人工鼓膜を製作・M. Banzer (アメリカ)	
1711年		・音叉を用いた聴力測定の実施 (イギリス)	
1796年	・難聴になった音楽家ベートーベン (ドイツ)、トランペット形補聴器を使用		
1800年	・Frederick Rein 社 (イギリス)、トランペット形補聴器・音響チューブ・スピーキングチューブを発売		 <p>ポルトガル王が愛用した両肘に開口部のある補聴器の付いた椅子 (1819年製)</p>
1819年	・Frederick Rein 社 (イギリス)、ポルトガル王のために花瓶や椅子に取り付けた補聴器を製作 ・P.Reis (ドイツ)、カーボンマイクロホンを製作		
1847年			 <p>耳飾りや仕込み杖などで巧みに隠されたラッパ形補聴器 (1880年代)</p>
1861年	・William V. Willis & Co 社 (イギリス)、トランペット形補聴器を販売 ・Boer 社 (国不明)、トランペット形補聴器を製作		
1869年		・The Great Northern Telegraph Company が設立 (デンマーク)	 <p>電気補聴器の開発以前はイヤートランペット形補聴器が良く使われていた (1900年頃)</p>
1876年		・Graham Bell (アメリカ) が電話機を発明	
1878年	・Werner von Siemens 社 (ドイツ)、難聴者向け電話受話器を発明	・電気装置による聴力検査を開始 (イギリス・ドイツ)	
1879年		・聴力測定器を Audiometer と命名 (イギリス)	
1880年		・ヘレンケラー女史が誕生 (6月27日) ・「万国聾啞教育会議」開催 (イタリア・ミラノ市) ・乾電池が完成 (ドイツ)	 <p>電気補聴器を使用して戴冠式を行ったイギリスのアレクサンドラ女王 (1902年)</p>
1883年	・Franck-Valery Freres (フランス)、補聴器製造会社を設立		
1890年		・聴力検査装置に骨導受話器を追加 (ドイツ)	 <p>Acousticon 社 (アメリカ) の補聴器・RDモデル (1908年)</p>
1892年	・A.E. Miltimore (アメリカ)、電気式補聴器の特許を取得		
1898年	・M.R. Hutchison (アメリカ)、電気式補聴器製作会社を設立、「Akoulallion」を開発		
1900年	・F. Alt 社 (オーストリア)、カーボンマイクロホンを利用した電気補聴器を製作		
1902年	・M.R. Hutchinson 社 (アメリカ)、カーボンマイクロホン補聴器「Akouphone」を量産		
1904年	・Hutchinson 社 (アメリカ)、販売会社 Acousticon 社を設立 ・Hans Demant (デンマーク)、Oticon 社を設立		
1912年	・Western Electric 社 (アメリカ)、骨導補聴器を製作		
1913年	・音量調節機能付き乾電池式補聴器、開発		
1914年		・聾の研究所 (CID) が創設 (アメリカ・セントルイス市)	
1917年		・空気電池の発明 (フランス)	
1920年	・Bell 研究所 (アメリカ)、真空管式補聴器を試作		
1921年	・Globe Phone 社 (アメリカ)、真空管式補聴器を発売		

海外における補聴器開発の歴史

年	海外の補聴器の歴史	関連事項	図版等
1923年	・Marconi社(イギリス)、ミニチュア型真空管式補聴器を製作		
1926年	・Western Electric社(アメリカ)、既製「Earmold」4種類を製作		
1929年	・Siemens社(ドイツ)、真空管アンプを使用した携帯式補聴器を製作 ・Hugo Lieber(アメリカ)、補聴器製造会社 Sonotone社を設立	・音刺激による脳波の反応を発見(ドイツ)	 <p>The Phonophor electric ear First Siemens hearing aid was introduced to the market 100 years ago</p> <p>A man with a Phonophor hearing aid, 1931</p> <p>by Ronny Abrecht</p> <p>In 1913, Siemens & Halske, the predecessor to Siemens, developed an innovative electronic hearing aid. The "Elate-Phonophor" was smaller and more powerful than other devices on the market at the time, and it was just the beginning of a series of successes that continue to this day in the development of Siemens hearing aids. The story of electrical hearing aids starts with technological advancements in telephony at the end of the 19th century. In 1878, Werner von Siemens made a considerable improvement in telephone transmission quality by integrating horseshoe magnets in telephone handsets. Soon thereafter, a key finding was made: the hard of hearing can understand a conversation better when it is transmitted via telephone.</p> <p>At the beginning of the 20th century, other manufacturers had already introduced electronic hearing aids to the market. However, these devices were large, heavy, and conspicuous. During this time, at the Wernerk in Berlin, Louis Weber was working on speakers and microphones for telecommunications systems.</p>
1932年	・Hugo Lieber(アメリカ)、骨導補聴器を発明		 <p>Acousticon社(アメリカ)の補聴器<タイプ44>(1935年)</p>
1936年	・Multitone社(イギリス)、自動音量調節器(AGC)付き補聴器を製作		 <p>Acousticon社(アメリカ)の骨導式補聴器<タイプ26>(1935年)</p>
1937年	・ポケット型補聴器、発売(アメリカ)	・ヘレンケラー女史、来日(1948年、1955年) ・聴覚のRecruitment現象を発見(アメリカ)	 <p>Acousticon社(アメリカ)の骨導式補聴器(1937年)</p>
1942年	・Danavox社(デンマーク)等、真空管式一体型補聴器を製作		
1943年	・Siemens社(ドイツ)、コンデンサーマイクロホン式携帯型補聴器を開発		
1944年		・Lybergerが1/2(ハーフ)ゲインルールを提唱	
1946年	・Oticon社(デンマーク)、初の自社製補聴器(Oticon TA)を発売 ・Siemens社(ドイツ)、家庭用電源使用のダイナミックコンプレッション機能付き補聴器を開発 ・Radioear社(アメリカ)、テレホンコイル付き補聴器を開発	・ハーバード・レポート(Davis博士)を出版	 <p>Siemens社(ドイツ)の携帯型補聴器<Phonophor>(1931年)</p>
1947年		・Bell研究所がトランジスターを発明	
1948年	・Allen-Howe Electronics社(アメリカ)、回路基板式補聴器「Solo-Pak」を発売		
1951年	・Siemens社(ドイツ)、真空管アンプ式ポケット型補聴器を発売		
1953年	・Bosch社(ドイツ)、ポケット型補聴器を発売 ・Radioear社(アメリカ)、太陽電池式メガネ型補聴器を開発 ・Acousticon社(アメリカ)、Amplivox社(イギリス)、ポケット型トランジスタ補聴器を発売		 <p>Acousticon社(アメリカ)がコペンハーゲンのヘルスエキシビジョンに出展(1939年)</p>  <p>Acousticon社(アメリカ)の生産施設(1956年)</p>
1954年	・耳かけ型トランジスタ補聴器、発売 ・Otarion社(アメリカ)、Amplivox社(イギリス)、Akumed社(ドイツ)など、メガネ型補聴器を発売 ・B.Johansson社(スウェーデン)、トランスポザー方式補聴器を開発		
1955年	・Dahlberg社(アメリカ)ほか、耳あな型補聴器を開発		
1956年		・Widex社が設立(デンマーク)	
1958年		・Madsen社(デンマーク)がインピーダンスメータを発売	
1959年	・Siemens社(ドイツ)、耳かけ型補聴器を発売		
1960年		・補聴器の測定規格(ANSI)を公表(アメリカ)	
1961年		・感音性難聴に関する刺激電極埋込を実施(アメリカ)	



Acousticon社(アメリカ)の補聴器<GA105>(1953年)



Zenith社(アメリカ)の補聴器<ローヤル>(1953年)



Philips社(オランダ)の補聴器<ローヤル>(1955年)



Amplivox社(イギリス)の補聴器<ソネット>(1958年)

海外における補聴器開発の歴史

年	海外の補聴器の歴史	関連事項	図版等
1962年	・H.L. Wullstein (アメリカ)、CROS方式メガネ型補聴器を開発		
1964年	・Zenith社 (アメリカ)、IC回路式補聴器を発売	・OTWIDAN (Oticon, Widex, Danavox) が設立 (デンマーク)	
1966年	・J. Brisky (アメリカ)、広帯域の電磁型マイクロホン使用の補聴器を開発		
1967年		・Starkey Laboratories が設立 (アメリカ)	
1969年	・R. L. Goode (アメリカ・Stanford 大学) が埋込型補聴器を試作 ・Willco 社 (ドイツ) が超小型の指向性マイクロホンを開発、耳かけ型補聴器に応用		
1970年		・ヒトの聴性脳幹反応 (ABR) の記録に成功 (イギリス)	
1971年		・イヤホン特性を測定する Zwisloki Coupler が考案 (アメリカ)	
1972年		・シングルチャンネル人工内耳手術がアメリカ、フランス、オーストリア、オーストラリアで施行	
1975年	・Unitron 社 (カナダ) が連続可変指向性の耳かけ型補聴器を開発	・人体模型を用いた補聴器の測定器 (KEMAR) を開発 (アメリカ)	
1977年		・Phonak 社 が設立 (スイス) ・空気亜鉛電池、開発 ・GN Danavox 社 が設立 (デンマーク)	
1980年	・Viennatone 社 (オーストリア) が骨導メガネ型補聴器を開発	・ロナルド・レーガン米大統領が80年代に補聴器を使用したことで市場が大きく伸長。その後、クリントン大統領も補聴器を使用。難聴と補聴器装用に對する偏見が大きく解消	
1982年	・J. Nunley (アメリカ・Auditone 社) らが携帯型デジタル補聴器を開発		
1983年	・カナル型 (ITC) 補聴器、開発・発売 ・Auditone 社 (アメリカ)、初期の携帯型デジタル補聴器を開発		
1984年		・アメリカで補聴器の大規模市場調査「MarkeTrak I」を実施 (Sergei Kochkin 博士)	
1987年	・Nicolet 社 (アメリカ)、初のデジタル補聴器を開発 ・Bernafon 社 (スイス)、Maico 社 (ドイツ)、Widex 社 (デンマーク)、初のデジタルプログラマブル補聴器を発売		
1988年	・Knowles 社 (アメリカ)、小型レシーバの開発に成功、CIC型補聴器が開発可能に		
1989年	・Mead Killion 博士が K-AMP (集積回路のアンプ) を開発		
1990年	・ReSound 社 (アメリカ)、ワイドダイナミックコンプレッションシステムを開発・発売		
1991年	・Oticon 社 (デンマーク)、完全ボリュームレス アナログノンリニア補聴器を発売		
1992年	・GN Danavox 社 (デンマーク)、DSP (逆位相ハウリング制御) 搭載の初の商用器種を開発		

海外における補聴器開発の歴史

年	海外の補聴器の歴史	関連事項	図版等
1996年	<ul style="list-style-type: none"> Widex社(デンマーク)とOticon社(デンマーク)がフルデジタル補聴器を発売 		
1997年	<ul style="list-style-type: none"> Siemens社(ドイツ)、デュアルマイクロホン搭載のデジタル補聴器を発売 		
2002年	<ul style="list-style-type: none"> Oticon社(デンマーク)、会話音声検出システムを発売 Oticon社(デンマーク)、個別化フィッティングシステムを開発 Siemens社(ドイツ)、アダプティブ指向性を発売 		 <p>Widex社(デンマーク)のフルデジタル補聴器<Senso>(1996年)</p>
2003年	<ul style="list-style-type: none"> NOAHlinkが発売 GN ReSound社(デンマーク)、オープンフィッティング補聴器を発売 Philips社(オランダ)、リモートコントロール付きオープンプラットフォーム型補聴器を発売 		 <p>GN ReSound社(デンマーク)のオープンフィッティング補聴器<ReSound Air>(2003年)</p>
2004年	<ul style="list-style-type: none"> Oticon社(デンマーク)、人工知能(同時並行処理)を発売 		
2005年	<ul style="list-style-type: none"> デジタル補聴器、市場占有率90%以上に Phonak社(スイス)、環境の識別とプログラムの自動切り換えをする機能を開発 Siemens社(ドイツ)、両耳通信と音楽認識機能を発売 Oticon社(デンマーク)、データロギングと環境学習機能を開発 		 <p>Starkey Laboratories社(アメリカ)のIIC補聴器<Otolen>(2010年)</p>
2006年	<ul style="list-style-type: none"> Bluetooth Technologyが補聴器に採用 Phonak社(スイス)、CRT補聴器を発売 Siemens社(ドイツ)、データラーニングと衝撃音抑制機能搭載を発売 Oticon社(デンマーク)、外耳道内レシーバ型補聴器RITEを発売 		
2007年	<ul style="list-style-type: none"> Oticon社(デンマーク)、中継器を介して携帯電話との通信が可能な補聴器を発売 Siemens社(ドイツ)、非接触式ニッケル水素充電システムを発売 Widex社(デンマーク)、RICタイプを発売 		
2008年	<ul style="list-style-type: none"> CIC補聴器が発売(各社) RICタイプの販売が伸長 Phonak社(スイス)、高音域の聞き取りを改善するノンリニア周波数圧縮機能付補聴器を発売 		
2009年	<ul style="list-style-type: none"> 携帯電話で補聴器の調整が直接可能なソフトウェアが開発 Siemens社(ドイツ)、耳甲介艇に装用するVibeを発売 	<ul style="list-style-type: none"> 欧州における補聴器の大規模市場調査「EuroTrak」がスタート(以後3年ごとに実施) 	
2010年	<ul style="list-style-type: none"> Starkey Laboratories社(アメリカ)がIIC補聴器を発売 GN ReSound社(デンマーク)、2.4GHzワイヤレス補聴器を発売 Oticon社(デンマーク)、環境適応型圧縮システムを開発 Widex社(デンマーク)、ワイヤレスRICタイプを発売 		 <p>Beltone社(アメリカ)の両耳通信機能付き補聴器<Beltone Promise RIC>(2012年)</p>
2011年	<ul style="list-style-type: none"> Phonak社(スイス)、狭帯域指向性マイクロホン搭載を発売 Siemens社(ドイツ)、防水タイプを発売 		 <p>Oticon社(デンマーク)の<opn>指向性機能から脱却した新たな騒音抑制システムを開発。2つの通信システムを補聴器に搭載(2016年)</p>
2012年	<ul style="list-style-type: none"> Beltone社(アメリカ)、両耳通信機能を発売 Widex社(デンマーク)、ワイヤレス機能搭載を開発 	<ul style="list-style-type: none"> 第2回EuroTrak2012を実施 	

海外における補聴器開発の歴史

年	海外の補聴器の歴史	関連事項	図版等
2013年	<ul style="list-style-type: none"> •Oticon社(デンマーク)、RECD測定機能と自動機能個別化フィッティングシステムを開発 •Unitron社(カナダ)、防水タイプを発売 •Siemens社(ドイツ)、48ch補聴器を発売 		 <p>Phonak社(スイス)の<Virto B Titanium>シェルにチタニウムを使用した補聴器(2017年)</p>
2014年	<ul style="list-style-type: none"> •GN ReSound社(デンマーク)、Bluetoothを利用したスマート補聴器を発売 		
2015年	<ul style="list-style-type: none"> •Phonak社(スイス)、環境適用オートマッチックシステム搭載を発売 	<ul style="list-style-type: none"> •WHO(世界保健機構)が3月3日をWorld Hearing Dayに設定 •第3回EuroTrak2015を実施 	
2016年	<ul style="list-style-type: none"> •Oticon社(デンマーク)、指向性機能から脱却した新たな騒音抑制システムを開発。2つの通信システムを補聴器に搭載 		
2017年	<ul style="list-style-type: none"> •GN Hearing社(デンマーク)とSivantos社(ドイツ)、遠隔サポートを利用した補聴器を発売 •Oticon社(デンマーク)、ハイブリッド型充電式を発売 •Phonak社(スイス)、シェルにチタニウムを使用した補聴器を発売 •Sivantos社(ドイツ)、非接触式リチウム充電式を発売 		
2018年	<ul style="list-style-type: none"> •Beltone社(アメリカ)、リチウム充電式を発売 •Sivantos社(ドイツ)、時間ドメイン処理機能を開発 	<ul style="list-style-type: none"> •第4回EuroTrak2018を実施 	

海外における補聴器流通の歴史

1990年～2017年の世界市場における補聴器出荷台数	
• 1990年： 4,050,000台	Enskilda Securities 社資料による
• 1991年： 4,066,000台	
• 1992年： 4,075,000台	
• 1993年： 4,146,000台	
• 1994年： 4,280,000台	
• 1995年： 4,472,000台	
• 1996年： 4,660,000台	
• 1997年： 4,951,000台	
• 1998年： 5,232,000台	
• 1999年： 5,660,000台	
• 2000年： 5,903,000台	Kaupting, Merill Lynch 社調査による
• 2001年： 6,148,000台	
• 2005年： 7,400,000台	
• 2007年： 8,400,000台	GN ReSound 社調査による
• 2010年： 9,400,000台	
• 2011年： 10,700,000台	
• 2012年： 11,200,000台	
• 2015年： 13,680,000台	EHIMA の調査による
• 2016年： 14,240,000台	
• 2017年： 15,050,000台	

欧州における補聴器技能者の養成

日本では、補聴器を販売するにあたって必要な知識や技術を習得していると認められる補聴器スペシャリストとして「認定補聴器技能者」がいる。公益財団法人テクノエイド協会が認定するもので、I～IV期までの講習を経て認定試験を受験することが可能となる。受講資格は大学入学資格者で、合格までは最低でも4年は必要である。

一方、欧米では補聴器スペシャリストの養成はどうなっているのだろうか。

アメリカにはAudiologistという聴覚や補聴器の専門家がいるが、2005年以降は大学で4年間の博士課程（3年間の座学と9カ月の現場研修）を修了後、国家試験に合格してAudiologistになれる。

欧州では、「欧州各国の補聴器技能者の養成に関する調査レポート」（『Audio infos』日本版：2010年8-9月号）によると、スペシャリスト養成の実態はさまざまである。その概略を紹介する。

●養成学校への入学資格・選考方法

ほとんどの国が日本と同じ大学入学資格（高校卒業）を要求しているが、ドイツとデンマークでは大学入学資格に相当するものは必要とされない。ドイツでは、技能者の養成教育が始まる1年前に入学許可を申請し、書類を提出。デンマークでは、高校2年レベルで養成学校に入学できる。

ドイツ、デンマークをはじめとする多くの国では書類審査で選考するが、フランス、ポルトガル、スウェーデンは入学試験がある。

●2～4年の養成期間

資格習得までの期間も各国ばらつきがある。

スペインでは2年、デンマークは2年半、ベルギー、イタリア、ポーランド、フランス、スウェーデン、スイスは3年、オランダ、ポルトガル、イギリスは4年である。ドイツは3年で補聴器技能者になれるが、自分の店舗を開く場合にはさらに3年が要求され、どちらも卒業試験がある。

なお、イギリスでは4年間に3,000時間の授業・研修があるが、スイスでは3年間で7,500時間である。

ギリシャではスペシャリスト養成の教育課程がなく、イギリス、アメリカ、カナダで補聴器技能者になるための教育を受けるのが一般的となっている。チェコでは補聴器技能者という職種がなく、耳鼻咽喉科医が補聴器のフィッティングを行うことが法律で定められている。

●研修と教育も千差万別

教育の80%が学校以外の機関で行われるのがドイツ、デンマークで、養成期間の大部分が職業実

習教育になっている。ドイツでは教育課程3年のうち4カ月半を学校で過ごし、残りは補聴器センターでの研修である。デンマークでは教育期間2年半のうち6カ月が学校での理論学習、6カ月が病院研修、残りの1年半が補聴器センターでの実習である。

学校教育40%と実地研修60%とバランスがとれているのがフランス、イギリス、ポーランド、スイス。特にスイスでは、3年間の全教育期間を補聴器技能者の下で勉強するが、これは5,000時間の実習に相当する。ベルギー、スペイン、ポルトガル、スウェーデンは学校教育が85%を占め、理論重視が特徴。

実習にもそれぞれ特色があり、ベルギーでは2年目に病院で1カ月半の研修があり、3年目には病院と補聴器センターで480時間の実習がある。ポルトガルでは4年の教育期間中、実習は360時間。スウェーデンでは4年の教育期間中、クリニックで600時間研修する。

イタリアでは医学教育が多いのが特徴。3年間123教科のうち、補聴器技術に関するのは10科目（約300時間）である。

●修士課程・博士課程

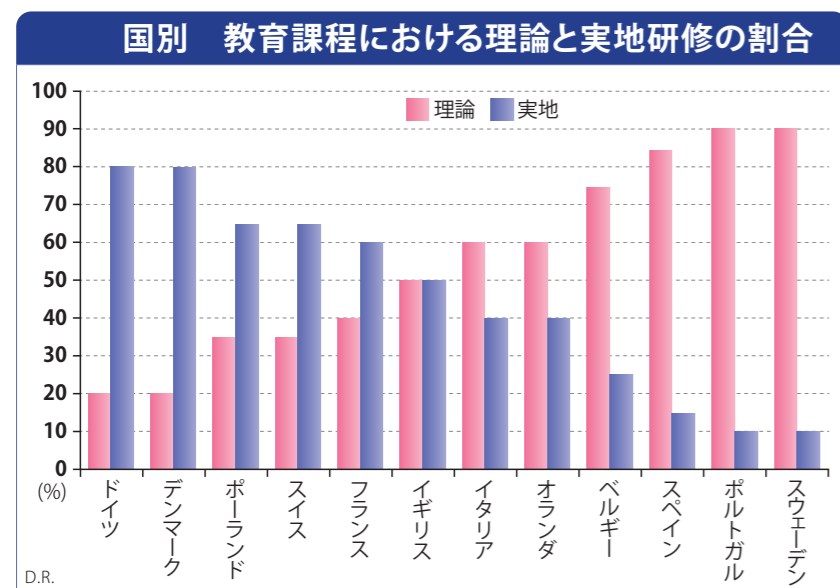
フランス、イギリス、スウェーデンでは、補聴器技能者の資格取得者に修士・博士課程を通して知識を深める機会が設けられている。ドイツでは自分の店舗を開くための3年間の追加教育が修士に相当する。この4カ国以外では、大学免状に相当する専門課程はない。

欧州の教育改革によって修士・博士課程は、実地に移されているが、共通の資格を作り、共通の教育内容にしたいという欧州補聴器技能者協会（AEA）の希望が実現する道はまだ遠いのが現状である。

引用：ENQUÊTE DAN BETTACH

国名	補聴器技能者養成学校入学資格	入学試験	学校の形態	就学年数	資格の種類	教育時間数	実地研修時間数	授業料	その後の専門課程(大学免除・収支)
ドイツ	高卒以下	無	職業高校	3年か6年	技術資格	540時間	2,520時間	交互に負担	開店のためには修士
ベルギー	高卒	無	高等学校	3年	オーディオロジー学士	2,200時間	720時間		無
デンマーク	高卒以下	無	技術学校	2年半	オーディオロジーアシスタント	720時間	3,000時間	無料	無
スペイン	高卒	無	高等学校	2年	補聴器高等技能者	2,000時間	400時間	無料(公立) 5,000ユーロ(私立)	無
フランス	高卒	有	大学	3年	補聴器技能者資格	1,140時間	1,715時間	1,740ユーロ	修士と博士
イタリア	高卒	有	大学	3年	補聴器技能者学士	3,000時間	2,000時間	4,500ユーロ	無
オランダ	高卒	無	大学	4年	補聴器技能者学士	4,000時間	3,000時間	無料	無
ポーランド	高卒	無	大学	3年	学士	750時間	1,500時間	無料	無
ポルトガル	高卒	有	高等学校	4年	オーディオロジー学士	3,000時間	360時間	2,000ユーロ	修士
イギリス	高卒	無	大学	2年(民間企業勤務)か 4年(公立機関勤務)	オーディオロジー学士(4年)	1,500時間	1,500時間	無料	修士と博士
スウェーデン	高卒	有	大学	3年	オーディオロジー学士	5,400時間	600時間	無料	修士と博士
スイス	高卒	無	高等学校	3年	連邦補聴器技能者資格	2,500時間	5,000時間	17,000ユーロ (スイス補聴器技能者協会 会員には12,000ユーロ)	無

「Audio infos」(日本版:2010年8-9月号)より



「Audio infos」(日本版:2010年8-9月号)より

創立30周年
記念誌

補聴器
業界の
歩み

4

座談会

「補聴器・よもやま話」

補聴器業界の歴史と 未来への提言

出席者(出身会社)



井村 行雄
リオン(株)



尾上 正嗣
ソニー(株)・
シーメンスヒヤリング
インスツルメンツ(株)



金山 恵一
コルチトーン
補聴器(株)



菅谷 保巳
日本補聴器販売(株)・
ワイデックス(株)



野々村 英一
パナソニック
補聴器(株)



福元 儀智
相模電機(株)



石井 喬志
九州リオン(株)



福山 邦彦
リオン(株)



宮永 好章
(株)神戸ヒヤリング
センター



司会：木村 修造
(創立30周年記念誌編集委員長)

記念誌編集委員



阿部 秀実



新井 英希



太田 昌孝



高坂 雅康



佐藤 誠



村上 眞吾



八嶋 隆

補聴器業界の「レジェンド」が集う

司会(木村) 本日は歴史的な日になるのではないかと思います。と申しますのも、今年(平成30年)、(一社)日本補聴器工業会(日補工)と(一社)日本補聴器販売店協会(JHIDA)が共に創立30周年を迎えます。この節目の年に当たって、後世に残る記念誌を発行しようと昨年計画をしてきました。そして、30周年の記念事業の一環として、将来この業界に入ってくる後輩の人たちにも参考になる歴史の記念誌を発行することになりました。その中の特集記事として、本日の座談会を企画させていただきました。

平成29年(2017年)の初め、風間力(日本補聴器センター)さんが亡くなられました。我々にとって大変厚恩のある方です。皆さんご承知の通り、日補工とJHIDAの両協会が設立される前、我が国に初めて業界団体として「全国補聴器振興協会」が産声を上げたのがその10年前です。合計すると40年という歴史です。その振興協会の機関誌の創刊号を見ておりましたところ、設立当時の発起人や理事の方々、記念講演をいただいた岡本途也先生の全員が旅立ってしまいました。これは早めに座談会を開いて貴重なお話を皆さまからお聞きしなければということで(笑)、本日まで参集いただいたわけでございます。

まず開会に当たり、本日まで出席いただきました皆さまから自己紹介をお願いいたします。それでは、一番ベテランの金山恵一さんからどうぞ。

金山 コルチトーン補聴器の金山です。40年前の振興協会の設立総会資料を読ませていただきまして、「あー、こういう方も、こういう人もいたな」ということを感じました。大阪吉田勝恵商店の前の社長 村上晴恍さんが僕より二つ年下で、育ったときのことを書いておられます。戦争前は輸入品しかありませんでした。戦後になって、やみくもに補聴器を作ったことが思い浮かびます。



宮永 齢(よわい) 80になりました神戸ヒヤリングセンターの宮永です。今日このお誘いを受けて、そうか、JHIDAができて30年もたったのかなあと、いろいろ思い出しております。よろしくお願ひします。

福山 福山でございます。先ほど司会者から、皆さんお忙しいみたいなことを言われましたけど、私は忙しいんです(笑)。私が所属するある団体の30周年記念誌を編纂しております、それを間もなく仕上げなくちゃいけないというヤマ場にかかっておまして、ちょっと忙しいんです。もちろん、こちらのことも考えましたよ(笑)。

福元 ここに資料がありますが、すっかり忘れていましたけれども、前回JHIDAで座談会をやったときの司会をしていた福元です。去年、ちょっと大きな病気をしまして、半年ばかり体調を崩して、今日はようやく出てきたところです。頭のほうは、薄くはなりましたが、昔のことは何となく覚えてはおりますので、よろしくお願ひします。

井村 日補工におりました井村です。本日はよろしくお願ひします。

尾上 ご無沙汰しております。尾上です。この業界を離れて7年になりますけれども、今、補聴器とは全く関係ありませんが、ボランティアで、高校生にキャリア教育を教える活動をしています。あしたも朝早く

から学校へ行かなければなりません。そんなことで福山さんより忙しい毎日を送っております(笑)。

石井 JHIDAにいました石井喬志です。九州福岡にいます。今はテクノエイド協会の認定補聴器専門店審査部会の仕事をしています、まだ全国を動き回っております。なかなか辞めさせてもらえませんが、まあ、あと2年ぐらいはするのかなあと考えています。日頃は地元でシニアクラブ——今老人クラブのことをシニアクラブといいます、そこのお世話をしている、仲間の聴こえの不自由さについて、いろいろと相談に乗っています。今日はお招きいただきましてありがとうございました。

野々村 野々村です。日補工は平成23年(2011年)までお世話になりましたが、もう離れて7年になります。今は自由な身で、農業とかゴルフとか自由気ままな生活を送っております。よろしくお願ひします。

司会 では最も若手の菅谷さん。

菅谷 菅谷です。私は以前はワイデックスというメーカーに勤務しておりましたが、今は巣鴨で補聴器の専門店を運営しています。卸と小売りでJHIDAさんと日補工さんにもお世話になっています。そういう面ではすべてを経験させていただいております。現在はユーザーさんと直接接しながら、「ああ、補聴器って、ちゃんとお客さまに受け入れられれば、非常に有り

難しいものだなあ」と感じている毎日です。今日はどうぞよろしくお願ひいたします。

司会 さて、既に皆さん顔なじみの方ばかりですので、気楽に昔話をして、後輩たちに歴史を残していければと思っておりますので、よろしくお願ひいたします。さて、本日お集まりの皆さんはまさしく「補聴器業界の偉人」なんです。その「偉人」たちのお集まりだということで、これから進めさせていただきたいと思ひます。

第1部 補聴器業界に携わった頃の思い出

司会 まず金山さんから順にお話しいただきたいと思ひますが、補聴器業界に入られたのはいつ頃ですか。

金山 私は父親が耳鼻咽喉科の医療機械を取り扱っていた縁で終戦直後の昭和21年(1946年)ぐらいからです。私がまだ小学校か中学1年ぐらいのとき、お客さんが補聴器が壊れたからと持ってきて、父親がいろいろとやっていたのを覚えています。

司会 ということは、補聴器の修理から始まった。



金山 恵一氏 コルチオン補聴器(株)

金山 そうです。

司会 当時の修理をした補聴器のブランドというのは覚えていますか。

金山 うーん、忘れちゃったなあ。箱型でした。箱型しかなかったんじゃないでしょうかね。

司会 昭和21年にはまだ補聴器は作って……。

金山 当初はないです。ですから外国製のですけど、

吉田勝恵商店さんの……。

司会 アコースチコンとかそんなような時代だったのかもかもしれませんね。

金山 アコースチコンだったかは忘れましたが、結構大きな(両手で10センチ余りの長方形を示して)このぐらいの……。それをなんとか直したんですよ。それから何人か訪ねてくるようになりました。

司会 ご自分で製造されたのはいつ頃からですか。

金山 昭和21年の末頃からだと思うんですよ。

司会 昭和21～22年(1946～47年)頃にはもうお作りになられた。

金山 昭和21年末頃に最初に当社が手掛けた頃は1L-4という、(親指の上半分ぐらいを示して)このぐらいの真空管が3本、ミニチュア管でした。その後、サブミニチュア管が出てくるんですが、それが補聴器製造を本業とする一つのきっかけです。当時耳の悪い人がこんなにいると思いませんでしたね。

司会 その頃は1年間にどのぐらい補聴器を製造販売されたのですか。

金山 サブミニチュア管はGHQから特別に供給いただいたことから、多分、200台ぐらいだったと思ひます。

司会 どちらかという、お客さんは耳鼻科のお医者さんからの紹介ですか。

金山 お医者さんから紹介をいただいてというのが最初だったんでしょうね。

司会 続いて宮永さんにお聞きしますが、何年ぐらいからですか。

宮永 私は多分、昭和28年(1953年)か翌年ですね。父親が事業に失敗して、私は夜学へ通いながら何かないかなと言っていたら、父の昔の仕事仲間から、「耳の遠い人が聴こえる器械を売っている会社がある」と入ったのが東神実業です。当時の小林理研製作所が福祉法の扱いを全国展開しなきゃいけないということでした。私が入社したときは「小林理研製作所関西出張所」という社名板がありました。

当時は、今金山さんのお話のミニチュア管の時代です。リオンも当時はまだ「小林理研製作所のリオン補聴器」で、リオン株式会社ではなかった。H-505とかH-510で本体は今のスマホを二重に重ねたぐらい

で、それと別に電源がある補聴器でした。小林理研製作所の製品の特徴は、イヤホンとマイクロホンがロッシェルに使っているクリスタルマイクとクリスタルイヤホンだったことです。ほかには卓上型といって、100Vの電源を使って、中には駐留軍の払い下げのメタルチューブの真空管を使ったものがありました。当時の補聴器の仕事は、金山さんが言われたように、ほぼ修理ですね。真空管を使っているの、ちょっとショックを加えると簡単に飛んじゃいます。コードは切れる、中に使っている抵抗コンデンサーも切れたり、パンクしたりと……とにかく仕事の半分ぐらいは修理の時代でした。

司会 その頃、小林理研さんでは年間どれくらい販売していたのですか。

宮永 小林理研全体でどれくらい売っていたのか分かりませんが、僕が入った東神実業はもともと繊維を扱っている会社でしたが、創業者が小林理研製作所と縁があって補聴器を扱うようになったと思ひます。その当時は確か「月に50台売ったら、社員全員を温泉旅行に招待する!」と言われていました。関西全部ですから、まあそれくらいの量だったと思ひます。そんなことで「じゃあ、頑張って売らなきゃ」と思ったことを覚えています。

司会 その頃は聴力測定や音質調整などはなかったんですか。

宮永 そのようなものは全くないです。とにかく耳につけてもらって、「アーアーアー。聴こえますか」と言って、ボリュームを適当に回して「これぐらいでどうでしょう」とか……。その後、音質調整と称する低音域をカットするだけのものがつきました。とにかく非常に簡単というか、その時分のお客さんは今と違って、ほとんどの方が伝音難聴でした。だから、とにかく増幅してあげれば、「いやあ、とてもいい」ということになります。身体障害者福祉法で地方を回っていたんですが、何とかお年寄りの方に——今は私が年寄りになっちゃったけど、当時は若かったですからね。「いやあ、こんなに聴こえるようになって」と拝まれたことがあります。

司会 その頃の補聴器の利得とか出力というのはど

のくらいだったんですか。

宮永 さあ、おそらく20～30デシベルもあればという感じだったんじゃないかと思ひます。

司会 伝音難聴が多かったというのは、戦争での爆風でとか……で。

宮永 いや、そういうことじゃなく、医療が行き渡っていないとか、今みたいに抗生物質なんてないわけです。ちょっと都会から離れると耳鼻科なんてないわけです。ま、そんな時代だったと思ひます。



宮永 好章氏 (株)神戸ヒヤリングセンター

司会 福山さんから、特にリオンさんのハードウェアを中心に、ご入社された当時、どんなものがあったのか、おおよそこのくらいで販売していたとか、お話しいただきたいと思ひます。

福山 リオン株式会社に入りましたのは、昭和36年(1961年)4月1日付で、社名が小林理研製作所から変更された翌年のことです。目指したのは補聴器だったのですが、私は補聴器に配属されることを一応拒みましたが(笑)。私が狙ったのは、直接本体にアタックするのではなくて、周辺を考えていました。私が入ったのは検査課です。そこでは入ってくる部品の検査をする、出荷する製品の検査をする、そこなら全体的にものが見られるのではないかと思った次第です。入社した当時の新製品は、日本で初めてのトランジスタでH-530という補聴器でした。わりと格好いい形をしていて、大変気に入りました。それが補聴器としては一つの境目であったわけですね。というのは、ミニチュア管、サブミニチュア管、それからトランジスタになって、その当時のトランジスタというのはサブミニチュア管よりも十分に小さいもの

ですから、世界的にはそのトランジスタならば十分に小さいという認識がある中で、補聴器に限っては「やっぱりトランジスタは大きいな」ということも感じていました。

また、境目と言いましたが、そのときから補聴器に対する名前が変わったんですね。今まではH-530と書いていたところが、HAという名前に変わっていった。HA-01、02、03というふうになっていきました。私は補聴器に携わっていると言いながら、現実には補聴器を設計したのはたった1機種だけです。「暮しの手帖」でも取り上げられましたが、HA-13という補聴器がありまして、あれの図面は私が引きました。補聴器そのものの設計としてはそれが初めてで最後の補聴器になりました。幸いにして時の上司が素晴らしい方、庄野さんで私はいろんな体験をさせてもらったということで、非常に有り難かったなと思っています。

新しい製品ができると、それを持って新宿のリオネットセンターに行って、お客さまに直接接触してその補聴器の感触を確かめることをしました。これも非常に良い経験だったなと思っています。その後、人工中耳であるとか、補聴器に電波をとか、いろんなことがありましたが、とりあえずこんなところにおきます。

司会 お客様の感触を確かめるといえば「暮しの手帖」は40年前から補聴器の商品テストをしています。40年前、30年前、20年前と、10年に1回ずつ、「暮しの手帖」は商品テストに補聴器を取り上げています。小林理研さんからリオンに変わったのは……。

福山 昭和35年に「小林理研製作所」から「リオン」という名前に変わっています。カタカナの会社名——これはもう革新的に早かったと思います。理学のり、音響のオンで、「リオン」という社名になり芸能人を呼んで大々的に催し物をやった……これは井村さんから聞いたことがあります。

尾上 「リオン」というブランドはありましたよね。ブランド名としては、私が小学生のころに、補聴器じゃなくて、クリスタルマイクやイヤホンに「リオン」というブランドがあったのを記憶しています。



福山 邦彦氏 リオン(株)

福山 もともと小林理研というのは軍需工場でしたから、潜水艦であるとか船舶の中に、例えば水深を測るものであるとか敵潜水艦が近づいていないとか、水中の音を聞いて判断するためのセンサーを作っていました。敗戦になって、そので上がったものを使うところがなくなってしまった。それで会社としては、研究所を成り立たせるためにもそれを商品化せざるを得なかった。結果としてそれが補聴器につながったということです。もともとはイヤホンとかスピーカーには「リオン」という名前をつけていました。社名が変わったときから、補聴器については「リオネット」というかわいい名前をつけようということにしたと聞いております。

司会 その辺のことは井村さんに後ほど。

福山 そうですね。お詳しいですから。

宮永 今話が出た福山さんが設計されたHA-13という補聴器は、当時、画期的だったですね。何が違ったかという、初めて低音域を増強するという補聴器で……。

尾上 福山さん、当時は電気系統もメカ系統も両方やられたのですか。

福山 私はもともと電気系統ですけども、そのときの仕事の分担上、機械部分と電気部分の指導に当たるといふか、共同でやっていました。

司会 それでは相模電機を代表して、福元さんをお願いいたします。

福元 懐かしい名前ですが、私はこの業界に入ったのが昭和40年(1965年)かな。当時、相模電機では計測器をいろいろ作っていました。当時は聾学校

とか難聴学級で使う教育機材、これを何種類にも分けて設計し、営業は喜んで販売してくれました。その頃はリオンさんについていかなきゃいけないということで、かなり追随していった覚えがあります。「補聴器はトランジスタたった4石?そんなもん、なんだ」と思ってばかにしていたんですけど、あの小さな所に入れるのはなかなか難しいんです。設計も少しやっていたんですけど、苦労した覚えがあります。

司会 「トリオ」というブランドは、誰がいつ頃?

福元 「トリオ」というのは日本光電工業が「トリオ」という医療機器を作っていて、それを相模電機の創立者の石村富明さんが商標を買取られて、「トリオ補聴器」としました。それは私が入る5年ほど前ですから昭和35年(1960年)ぐらい。当時「トリオ補聴器」は日本光電工業さんが作っていたので、私が入社したときは、特殊学級、難聴学級、聾学校の訓練機器や音響器械がばんばん売られていて、手を変え、品を変えて同じようなものをたくさん作って販売した覚えがあります。

司会 入社された昭和40年(1965年)当時に相模電機さんは年間どのくらい補聴器を製造販売していましたか。

福元 補聴器は少なかったと思います。1,000台なんて売ってなかったと思う。何百台程度でしょうか。それから10年ぐらいしてから「年間1,000台ぐらいは売ろうよ」というような話がありましたから、少なかったと思います。当時、補聴器といったら一般市販はほとんどなく、身体障害者福祉法の関係ばかりでした。それから耳かけ型が出だしてきて、デンマーク製の耳かけ型補聴器を緊急輸入して、それをOEMブランドで販売しました。まだ私がやっていた当時は耳かけ型ぐらいで、私が辞めてからオーダーメイドが出るようになりました。

アナログからデジタル時代へ

司会 それでは石井さん、この業界に入られたのは……。

石井 入社したのは昭和42年(1967年)ですけど、

リオンの九州と山口の代理店の小宮電気という会社に私の学校の先輩の末松重治さんがいて、来ないかということでお誘いを受けて入社しました。そしてすぐリオンに研修に行けということで、1週間、朝から晩までみっちり勉強させてもらって、「へーえ、こんなもんか」と思いました。その後、日本オーディオロジー学会の聴力検査士の講習会で盛岡に行きました。ここでも1週間。入社してから2~3年間はずーっと勉強させられて「こんなに補聴器というのは難しいものか」というのを実感しました。そのときの小宮電気の業務は身体障害者福祉法の取り扱いが多くて、巡回相談でずっと行っていました。3点測定ですね。500、1,000、2,000Hzをオーディオメーターで測りました。オーディオロジー学会の聴力検査士の資格があったので、我々は県からの委嘱状をもらって、耳鼻科の先生の横で先生の補助員としてやっていました。

そうやって補聴器を交付するのですが、特に思い出があるのは、若い女性の方が来られて、補聴器をつけたんですね。そしたら涙を流されて、「聴こえた」と。よく聞くと、お嫁にいかれて難聴だったから非常に苦労されたようなんです。それで補聴器をつけたら涙されて、その補聴器をすぐ頭の髪の中に入れて見えないようにする。その当時は補聴器を使うことに対する世間の認識がなかったんですね。それを見て、「ああ、これは良い仕事なんだなあ」と思いました。

もう一つ、その後に聾学校のほうに行くことになりましたが、地方ではその頃幼稚部が創設されようになっていました。親元から子どもが離れて来るんですね。



石井 喬志氏 九州リオン(株)

私は先生の授業中に後ろに座って補聴器を修理します。そしたら、2歳ぐらいの子どもがパッと来て、私の股に座って、そこで授業を受けるわけです。その時分にはHB-13の中にほこりがたまるんですよ。そこで静電気を起こしてマイクが駄目になる。食物も入るんですね。そのほこりを取って修理していたら、先生が「いやあ、石井さん、よかったらそのまま座らせてください。親元を離れて恋しいから」と。そういうこともしまして、「ああ、いい仕事だなあ」と思った、そういう経験がありますね。

それともう一つ。小宮電気の横に「リオン株式会社福岡出張所」の看板が下がっているんです。身体障害者福祉法では、それが契約なんですね。補装具というものは、その人の身体的な欠陥とか不自由度とか日常生活の度合いにフィッティングする、ちゃんと合わせる——これが義肢義足の考え方で、それが全部流れてきているんです。だから補聴器も、その人に合わせるように調整する、それはメーカーじゃないと駄目だということで、メーカーの名前でないと契約できない。だから、メーカー契約でないと駄目だと。それがいつの間にか薄れていますけど、そういうのをちょっと思い出しました。

司会 胸の詰まる思い出話をお聞かせいただきました。それでは、井村さん。リオンさんの営業の生き字引ですが、まず入社されたのは何年ですか。

井村 入社は昭和33年(1958年)で、ちょうど今60年になります。皆さんのようにいろんなことはよく分からなくて……。伊勢の田舎の高校を出たばかりで、補聴器のことはよく分かりませんでした。いろんなものを読んで勉強しました。ここにもあるJHIDAの創刊号も何回も読みました。武田治男(理研産業)さんのあいさつとか、河野康徳先生、岡本先生や風間さんなど、みんな懐かしいですね。先ほどの福祉法の話とか、いろんなことを読んで少しずつ覚えていったというような状況です。ですから、大した実績というのはいないんです。

司会 ここにおられる方の中で一番日本中の販売店を回ったのは井村さんではないかと思いますが。

井村 (笑いながら) 本当に日本中を、北海道から沖



井村 行雄氏 リオン(株)

縄まで行ったし、宮古から石垣までずっと回らせてもらって、とても良い経験になりました。

阿部 実は私が補聴器を始めたのが、井村さんが仙台の営業所長時代に引っ張り込まれた関係で……。あのときは本当にありがとうございました。

井村 とんでもない。

司会 井村さんにはまた後ほどお願いします。次に尾上さんお願いいたします。

尾上 私は社会人になったのが、東京オリンピックの年だから昭和39年(1964年)で、それから15年ほどテレビ業界にいたので、補聴器業界に入ったのは昭和54年(1979年)ですね。当時、ソニーが新しい補聴器のシリーズを作るということで転社しました。当時はポケット型のトランジスタを数個使ったようなものでしたが、耳かけ型になると、アナログのICが使われていました。もうこの頃から電気回路はブラックボックス化してきていましたね。私はもともと電気技術ですけど、オーディオロジーはその頃は全く素人ですから、井村さんではありませんが、いろいろ勉強させられました。一つ印象に残っているのは、オーディオロジー学会が昭和55年(1980年)に仙台で開催され、そこでデジタル処理の話が出ているんですね。当時は今のNTTがまだ電々公社で、その技術者がこの部屋に入るぐらいの大型コンピュータで処理して、言葉と雑音を分けるんだとあって、そのデモなんか聞きました。これはすごいなと思いましたけど、考えてみると、そういうものが実際にデジタル化されるのにあれから20年ぐらいかかっています。20年たつと、この部屋ぐらいのものがこの耳かけ型の

中に入ってしまう。そのぐらいの進歩だったんでしようけれども、これはもっと進歩するのではないかと考えています。

入社した頃の台数は業界全体としては確か25万台ぐらいと記憶しています。なかなかその25万台が増えないとかいろいろ言われていましたけど、私がこの業界を去ったのがそれから32年後です。数社変わりましたが、その頃でやっと50万いくかないか。今50万ちょっと超えたんですかね。

司会 56万台を超えました。

尾上 ですから、私が業界を去るときはまだ47万~48万台じゃないかと思えます。私がこの業界にいた間に2倍にはいかなかったということですね。

司会 ソニーさんが補聴器を始められたのはいつ頃ですか。

尾上 ずいぶん古いと思いますよ。それこそさっきの相模電機さんのトランジスタの補聴器が出たか出ない頃くらいでしょうか。

司会 そんなに古いんですか。

尾上 ええ。私が聞いているのは、当時の井深大さんがアメリカへ行って開発間もないトランジスタを調査したときに、高周波には使えないので、低周波増幅ぐらいにしか使わない。低周波増幅に使うのは補聴器だということで補聴器を開発したと聞いています。

司会 東通工の時代ですか。

尾上 そうですね。だから昭和33~34年(1958~59年)とか、そういう時代じゃないでしょうかね。

司会 そんなに早かったのですか。



尾上 正嗣氏 ソニー(株)・シーメンスヒヤリングインスツルメンツ(株)

尾上 ええ。ただ、販売ルートが電器店ルートでしたから、それじゃあまずいということで、専門店の技術者を満足させるような器械のシリーズを作ろうという話があって、私が入ったのはその一環ですね。ただまあ、残念ながらソニーはオーディオロジーのノウハウの蓄積が十分でなかったことで、最終的には私が辞めた後、撤退しましたね。

司会 ソニーさんが止められたのは退社された後ですか。

尾上 そうですね。完全に撤退したのは2年ぐらいたってからじゃないですか。

司会 私が最初に尾上さんとお会いしたのはソニー時代でしたね。

尾上 そうでしたね。

司会 その頃は日本光電工業がOEMでソニーブランドの補聴器を製造されていましたね。

尾上 ええ。ソニーブランドの補聴器に木村さんの会社を取り扱っていたダナボックスのイヤホンやスイッチなどを使っていたことがありました……。だから、私の付き合いでは、木村さんがこの業界で最初にコンタクトした方になるんじゃないかと。

司会 そうですね。初めてお会いした野々村さんは、松下通信工業の佐江戸工場で新婚間もない時代でした。いつも愛妻弁当を持っていた……。 (笑)。

野々村 私は昭和23年(1948年)生まれで、団塊の世代。松下電器に昭和46年(1971年)に入社しました。大卒だけで1年間に1,500人ぐらい採ったんです。入社は松下電器ですけど、自宅が東京だったので、通信工業という横浜にある業務用の機器を扱っている会社を希望し無事そこに移りました。事業部は7つぐらいあり、大学で高周波のフィルターをやっていたので、希望は電波機器だったんですが、どういふわけか配属されたのは視聴覚機器事業部でした。業務用のオーディオ機器もやっていたところですが、そこで配属されたのが補聴器の技術部門だったのです。技術部門といっても担当が一人いるだけで、私が入って二人ですが、もう一人は1年ぐらいで辞めてしまっていて、2~3年私一人でやっていました。松下では、最初はリオンさんで設計をしていた

だいていました。昭和34年(1959年)に松下の補聴器の第一号はポケット型ですが、これはリオンさんで設計したOEM製品です。

福山 私が出荷検査しました(笑)。

司会 その頃は出荷検査係だったわけですね。

福山 ええ、私は検査から入りましたから。

野々村 発売がその翌年の昭和35年(1960年)で第1号ですね。ちょっと細長い。

宮永 ペンタイプというか……。

野々村 3号機ぐらいまでは設計をお願いしたんじゃないかと思います。自前で作ったのは昭和37～38年(1962～63年)頃です。私が入ったのは46年(1971年)ですから、それまでは私の前任者が細々と設計をやっていました。

ちょうど私が入る前に、松下電器とフィリップスがICを開発し、その第一号のICがOM-200という4石のICでした。小さくてマッチの頭ぐらいですけど、それを使った耳かけ型の補聴器が結構好評でした。当時、松下は電器屋さん売ってましたから、私が入って1～2年ぐらいいは、販売応援で各地区の販売店に応援に行かされました。その時にキットと称して、ポケット型と耳かけ型を3台で1セットとして電気店へセット販売をしていました。当時は電気店が多かったので年間何万台か販売していたと思います。また、当時の補聴器は簡単な音質調整や出力調整などしかないものが多く、電気店でも調整が可能な状況で販売をしていました。

司会 菅谷さん、今日は歴史の話なので、ワイデックスのことより、その前身の日本補聴器販売さんの



野々村 英一氏 パナソニック補聴器(株)

思い出をお話してください。

菅谷 私が入社したのは昭和56年(1981年)で、その頃の補聴器はもうICの時代です。結構技術的に進んでいて、高音急墜型の聴力の人には眼鏡型のクロス補聴器を勧めていました。オープンチューブを使って。

司会 製品はどこのですか。

菅谷 ワイデックスです。ワイデックスは眼鏡もやっていたから、製品的にはV1、V2という眼鏡型がありました。眼鏡のふちに線を通して、レシーバーとマイクロホンの距離を保ってハウリングはしない、両方で使えるというようなクロス型——特徴的なクロス型でした。それから骨伝導型補聴器がオーストリアのベナトーンという会社。これ2機種ぐらいでやっていたね。製品的にはインパクトがあるものでした。私が入社して10年ほどしてからデジタル補聴器が初めて出て、デンマークから製品が来たときに初めて耳にしました。で、トイレに行って聞いた。そしたら、それまでのICの補聴器はトランジスタノイズが若干あるのですが、初めてそのデジタル音を聞いたときに、白内障を手術した後にすっきり見えるような、すごくいい音がしました。「これは相当売れるな」という感覚を覚えていますね。経営陣と「じゃあ幾らで売ろう」という押し問答があり、その頃日本補聴器販売は経営が非常に苦しくて、実はもうつぶれちゃう寸前でした。今は亡くなった吉野利一さんが個人の財産を担保に入れて銀行からセミナー資金を借り入れて、それを元手に全国でデジタル補聴器のセミナーをやって、そこから飛躍的に売れたという経験があります。

司会 確かスタンドアローンで調整できるものを作ったんですね。あれで爆発的に売れた。

菅谷 それと、私が入社した当時、勉強する教材としては、今JHIDAで準備しているような教材がなかったものですから、「ヒアリングエイドハンドブック」というのがアメリカにありまして、単語をつなぎ合わせれば何を言わんとしているのか若干は理解できましたので、それで勉強しました。それと毎月「ヒアリングジャーナル」というアメリカの業界誌ですが、写真を

見ているだけで、業界の流れや新しいニュースとかを勉強していた記憶があります。

司会 日本補聴器販売さんというのはいつ頃創業された会社ですか。

菅谷 昭和31年(1956年)、私が生まれた年です。

福元 技術屋さんで樋口さんという方がいませんでしたか。

菅谷 樋口は、創業社長の長男で2代目社長が東



菅谷 保巳氏 日本補聴器販売(株)・ワイデックス(株)

芝に勤務していたときの部下だった方ですね。で、東芝を退職させて日本補聴器販売に技術部長として引っ張ってきた。

福元 ヨーロッパに視察に行ったときに一緒になりまして、センソのことを技術的にレクチャーしていただいて、すごい考え方だなあと感じましたね。びっくりしました。

宮永 話が戻るけど、野々村さん、今のパナソニックさん、松下さんが補聴器を自社ブランドで作られた以前にフィリップスの補聴器を販売されたというのはご記憶ないですか。

野々村 いや、それは聞いてないです。

宮永 ポケット型の時代、松下貿易さんだったと思うんですけど、フィリップスの——。

野々村 フィリップスじゃなくて、ベルトーンを扱ってました。ニュージャパンさんがやる前に、ベルトーンの眼鏡型。

宮永 フィリップスブランドのポケット型を松下さんから仕入れて売っていたことがあるんです。

野々村 それは松下電器貿易が輸入してやったんじゃないですかね。僕らのところではフィリップスは

やっていないです。松下電器貿易には補聴器の部品の購入などをお願いしていました。

司会 今宮永さんからお話がありました以外にも、フィリップスとかカールツァイスがボッシュを、それから玉屋補聴器販売がインタートーンをやったり、日補工の会員も出入りが相当ありまして、現在に落ち着くまでいろいろありましたが、補聴器の歴史ということを考えて、ここにいらっしゃる方々に代表して出席してもらったということです。

難聴児の聴能教育と補聴器

宮永 それと、もう一つ古い話に触れておきたいのは、難聴児の聴能教育の話、これが昭和35年(1960年)に岡山で初めて内山下小学校に難聴学級ができた頃から非常に盛んになった。それ以前には聾学校で聴能教育をやっていた。聴覚障害児童の聾学校・難聴学級等へ補聴器の説明、売り込みに行った。トリオの福元さんなんかがずいぶん頑張って集団補聴器だとかなんだとかを作っておられ、私らとは、とにかく目の敵みたいなものでした。こっちはリオンのものを担いで行っているわけで、競合したということがあります。

その頃から、昭和35～40年ぐらいいは難聴児の聴能教育が盛んになって、同時に補聴器のフィッティングということが言われ出したんじゃないかと思います。私どもはそれまでは、さっき言ったように、「アーアー」と言ってやっていたから。私自身考えると、ちょうどその頃にハーバードレポートに出会うわけですね。「いやあ、アメリカという国はすごいな。日本と戦争をやっているときに、難聴者のために大学で補聴器のフィッティングをやっていた。すごいなあ」ということを感じた、そういう思い出があります。

司会 それは大変貴重な記憶ですね。時間が少々ありますので、ここで我々3名からも発言させていただきます。それでは佐藤さんからお願いいたします。

佐藤 私も今から43年前にこの業界に入ったのですが、今のマキチエ補聴器の朝山栄一さん——この4月にお亡くなりになりましたが、彼に誘われまして、

「小売りの電器店から補聴器の専門店を作りたいんだ。一緒にやらないか」とお話をいただきました。あの頃はリオンの代理店でしたので、入った1週間後ぐらいにすぐに、リオンの研修に行かされました。その後、次の年だったかな、石井さんが言ったように、順天堂大学での聴力検査の講習会で勉強させてもらったという経緯があります。

そんなこんなでこの業界に入って、最初に覚えているのは、福祉法の耳かけ型がちょうど出てきた当方で、福祉法の器械が箱型かどうか覚えていませんけど、確か1万8,200円ぐらいだったかな。それと当時は集団補聴器が華やかな頃でした。聾学校にはまず確実に入る。その後は各地にどこの学校でも難聴学級とかことばの教室ができ始めている頃だったので、忘れもしませんが、相模電機の松岡精一さんっていましたね(笑)。あの方と学校の玄関先でいつも、「おい、おまえ、何しに来たんだよ」と、よくやりとりをやっていましたねえ。うちが負けて帰ってくると、後で散々「なんで相模電機に負けるんだ」みたいなことを言われてね。そんなこと言ったら、あの人は営業が上手なんですよ(笑)。僕はいつも負けていましたから。

そうしているうちにFM補聴器が聾学校で認められました。確か、新潟聾学校が第1号だったと思います。そのときはオーティコンのですけど、箱型の補聴器を受信機に載せるものでした。結果的に納めただけで、あまり使ってなかったみたいです……。そんな思い出がありますね。補聴器ってまだまだあの頃は「モノ」という感じでしたね。福祉事務所なんか回るわけですけれども、私、佐渡を担当していたんです。佐渡に行くときなんかひどいもので、前に行ったときの見積書と同じ標準型や高度難聴型を段ボール箱に二つぐらい持って行きまして、それを市役所の窓口にも置いてくるだけ。で、「佐藤さん、見積もり書いていって」と言われて、意見書を見ながら見積もりをばーっと書くんです。「次来るときはこれ持ってきて」という感じでしたね。だから、直接その患者さんに会わないで渡していた頃が長く続きました。

その後、「これじゃまずいだろう。やっぱりちゃんと



佐藤 誠氏 記念誌編集委員

本人に渡そうよ」という話になって、病院の外来に行くようになったのはその頃からです。お役所の主導で、特に新潟の場合、更生相談所には聴覚の担当者はいなかったんです。だから、整形外科の先生方と一緒に回る、そんな感じでしたから、大学の先生を連れていって相談会という長蛇の列じゃないですか。そうするともう終わるまで帰れないんですよ。そんなようなことがしょっちゅうありました。今から思えば、つらかったけど、楽でしたね。だって置いてくればいいんですから(笑)。その場で修理なんて、あの頃はハンダコテ持って行って、誰もが簡単にピピッとやっていました。修理業もなにもあったもんじゃない。

司会 あの頃は修理がいっぱいあったから、買い換えのサイクルも早かったでしょう。

佐藤 いや、うちは、修理専門に一人雇えたんですから。そんな時代でした。

おそらく福山さんが作られた器械を、我々がハンダコテで修理したのかもしれない(笑)。

福元 私は昭和47年(1972年)に補聴器店を開業しましたが、福祉事務所に行くでしょう。そうすると、「要らん。一社でもう間に合っている」と。どうやっているかという、「聴こえるか」と言って、オーケーだったら、そのまま渡す。ただし、リオンさんだけだということで、苦労しました。リオンさんはもう寡占状態でしたね。

宮永 そうなんです。ほんとに今考えるとひどい話で、昭和35年(1960年)頃というのはリオンが95%近くシェアを持っていたんじゃないかなと思います。

福元 契約するのも苦労した。

宮永 さっき佐藤さんの話がありましたけど、福祉法が始まった頃というのは、「はい」と補聴器を渡していたんですね。それでいいもんだと思っていたら、真空管の時代に県で競争入札があり、「今年は何台だ」というわけです。ところが入札で負けまして……。その1年間はそのある県では全く出なかった。

福元 どこに負けたんですか。

宮永 ブランドは「アポロ」で、太陽電子だったんじゃないかなあ。

尾上 太陽電子は真空管メーカーでしたね。サブミニチュア真空管かなんか作っていましたよね。サブミニを作っていた関係で、補聴器も作ったんじゃないでしょうかね。

司会 コルチトーンさんはベナトーン補聴器の代理店をしていましたよね。あれも古いですよ。

金山 古いですねえ。今から40年ぐらい前。

司会 それでは阿部さん、なれそめは聞きましたので、思いのたけを。

阿部 私は補聴器の販売しか経験がなくて……。補聴器販売にどっぷり足をつけたのが昭和51年(1976年)でした。その前まで、百貨店に勤務して婦人服関係や呉服関係の仕事をして、それから一転して音楽業界に転職しました。レコード・楽器店に入り、初めての日に補聴器が欲しいというお客さまが来ました。その店では補聴器は置いてあるけれど、担当者がいなかったんです。「おまえ、口だけは達者だろ」ということで、お客さまの相手をさせられました。A4版に○×を書いて、かぎかっこがついたグラフをお客



阿部 秀実氏 記念誌編集委員

さまがお持ちになったんです。何のことか全然分からない。仕方がないので補聴器の取扱説明書を膝の上に置いて、それを見ながらお客さんに説明しました。先ほどの「アアア、聴こえるか」と同じレベルですけれども、お客さまが大感激するわけです。「若返った」と。お金を払っていただいて、「ありがとうございます」とこっちが言う前に向こうから「ありがとう」と言われまして、こんなにすてきな業界ないなど。それから四十数年続けております。今でもこんなすてきな仕事はないと思っていますので、死ぬまで現役でやりたいと思っています。よろしく願います。

井村 文明堂さんという楽器屋さんじゃなかったっけ。

阿部 そうです。

井村 文明堂という、楽器のほうでは有名なお店ですよ。

司会 皆さんのお話をお聞きしていると、補聴器業界に入る運命だったという方はほとんどいませんね。金山さんは、お父上の跡を継がれたということですが、他の方はどなたも、なぜ補聴器の業界に入ったのか特別な理由がない方ばかりだと聞いておりました。

私自身も、ある外国商社に勤めていましたが、相模電機に石塚英輔さんという方がおられて、この方から外国補聴器メーカー(デンマークのダナボックス)との文書を翻訳するアルバイトをしないかと誘われたのがこの仕事との関わりになりました。それが昭和44年(1969年)で、翌年が大阪万博の年でした。その後、輸入数量が上がってきて社内に貿易部を作るので来てくれないかと誘われ昭和46年に相模電機に入社しました。その後、石塚さんが相模電機を退社することになり、新宿の喫茶店で相談した結果、昭和47年に「ダナジャパン」という会社を設立しました。当初はリオンさんに製品の販売をお願いしたこともありまして。そこで、井村さんと初めてお会いしました。そして、30年を経過して2001年(平成13年)にダナジャパンをGN社に売却しました。

私も補聴器の仕事をやるとは思いませんでしたが、たまたま自宅の近くの耳鼻科の先生から



頼まれて、患者さんの自宅へ行って補聴器のお世話をしていました。その頃のお客さまで息子さんと二人暮らしの女性がいる、ポケット型を1週間お貸して1週間後に行ったら、そのお客さんが私の顔を見て泣くんですよ。不審に思って聞いたら、その1週間前までは難聴が理由で親子の会話がほとんどなかったそうです。ところが、息子さんが帰ってきて、「なんだ、おふくろ、補聴器使ってるのか?」「うん、今日借りて使っているの」「どう? 俺の音が聞こえる?」「うん、よく聞こえる!」ということで、この1週間、親子の会話が復活したと。それを聞いて、僕はこれは一生の仕事じゃないかなと思った次第です。

では、以上をもちまして、第1部はこれで終了させていただきます。

第2部 日補工とJHIDA設立時の思い出

司会 皆さんご承知の通り、本年JHIDAと日補工が創立30周年を迎えます。また、この30年間の両協会の歴史はさまざまな形で記録されていますので、この第2部で皆さんから話してもらいたいのは、なぜこの両協会ができたのか、設立前夜の記憶などを

お願いできればと思います。日補工の方は私と井村さんが話をさせてもらいますが、JHIDAについては、まず宮永さんからお願いいたします。

宮永 やっぱり専門職を作らなければいけないのではないかという話が起ったことがあるのですが、今から40年ぐらい前になるのかなあ、オーディオロジー学会の中に補聴研究会ができました。これのごく初期の頃ですけど、岡本途也先生に、「おまえちょっと兵庫県の幼児教育についてのチーム活動というか、医療と教育と福祉・補助金、これがどうなっているのかをしゃべれ」と言われたときだと思えますよ。確か盛岡か仙台での学会があったときだったと覚えているんですが、しゃべった後、岡本先生に昼休みか何か休憩時間につかまって、「補聴器販売に携わるおまえらの専門職の資格を作らなきゃいかんと思っているんだけど」という話をされたことがあります。

それからずっとそのままになっていて、昭和62年(1987年)でしたか、日耳鼻学会の「補聴システム研究会」に、いきなり招集されたのが始まりかなと思います。そして、資格制度を作るなら業界全体が賛成をしていることが必要だ。どうしても業界団体が要る。当時の日本の補聴器業界はメーカーの力が非常

に強かった。業界団体としては「全国補聴器振興協会」があったんです。それからリオンの系列ではリオングループとしての販売店の会があって、それから確か野々村さんの——ナショナル店会を中心とする専門店会があった。しかし、全部を網羅したものはなかった。

ちょうど木村さんが中心的な存在で活躍されていた頃、「振興協会」はリオンというブランドがついている人を除外したかたちで販売店を招集されたんですね。私はたまたま昭和58年(1983年)に独立して、リオンの看板を外して5~6年で招集された。一方で何か団体作らなきゃいけないんじゃないかといったけれども、それぞれのグループがあって、どこが中心になるのか。私は関西にいるものですから、東京で誰かうまくまとめてくれるだろうなと思っていたら、どうもこれがなかなかまとまらない。

これでは仕方がないと大阪を中心にまとまって何か考えるかということで「近畿補聴器販売店懇話会」を立ち上げたんです。これは3回しか会合していませんが、大阪の村上晴悦(吉田勝恵商店)さん、京都の岡崎安彦(岡崎補聴器)さん、そして私。当時専門店は多くなかったわけですが、京阪神でだいぶ分かっている人たちに声をかけて集まったりしたわけです。そういうことを始めたら、東京の方で風間さんたちが「関西で何かやりよるらしいから、これはいかん」ということで、急きょ集まろうということになったのではないかと考えています。それから設立準備会というようにことになりまして……。

阿部 発起人はどなたですか。

宮永 発起人は多分……。

司会 井村さんがお持ちの「フィッティング」の創刊号、そこに発起人だとか理事だとか書いてあるんじゃないですか。

井村 「創刊に寄せて」というのはあるけど。

司会 後ろのほうにありませんか。

井村 規約はあるけど、役員は入ってない。設立趣意書だね。

宮永 武田治男さんが一番メインで、裏話をすると、武田さんは振興協会のメンバーであるわけですね。

一方ではリオネットの中部地区の代表だった。

尾上 私が記憶しているのは、協会の立ち上げのときに、マルツ電波の土谷歳男さんが会長ではなかったですか。設立の総会であいさつされたのを覚えています。

司会 副会長でした。

尾上 会長は誰でしたか。

宮永 設立時は、武田治男さんが会長で、土谷さんと私が副会長。

司会 東京の中野サンプラザで創立総会をやりましたよね。

宮永 その準備会のときだったと思うんですけども、福元さんが名司会で、分解しそうなったのをなんとかうまくまとめてくれたんですよ。

技能者基礎講習会をスタート

司会 石井さんは何か思い出がありますか。

石井 「新たな医療関係職種の資格制度の在り方に関する検討会」の中間報告が出て補聴器の資格販売が必要だという流れがありました。私は、6年間の実務経験で認定補聴器技能者の資格試験を受けることができるところからの関わりです。3年間の販売経験で、メーカーの基礎講習会を受けて、その後に実務研修を受けるということがずっと続いてきたんですね。その実務研修の中に、メーカーの基礎講習会が統一されていないという危機感を持っていました。

そんなときに、平成10年(1998年)に言語聴覚士が誕生しました。これで聴力測定も全部できるということを聞いたので、これは危機感を持たなくちゃいけない、世間に通用する講習会にしなくちゃいけないということで、メーカーの基礎講習会を外して技能者基礎講習会を作ろうということで、カリキュラムを作って技能基礎講習会を始めました。この基礎講習会を作るときに、JHIDAで村上さん、阿部さん、塚田昭彦さん、田代実さん、久保順子さん、そして私とで下準備をしました。そのとき、私が岡本先生から聞いていたのは、相変わらず委員会で出てきた言葉で、義肢装具の国家試験が通り、学校を出て

いない人に対しては販売実務経験者に対する恩典制度があったので、補聴器販売者についても道は開けるよ。岡本先生は、「いつか学校を作らないと、これは国家試験にならない」と再三言っていました。名古屋のあそこに……。

司会 日本聴能言語学院ですね。

石井 あそこに日本で初めての学校があったんで、そこに頼みに行ったんですね。瀧本勲先生だったか



木村 修造氏 創立30周年記念誌編集委員長

な。で、「まあ、いいだろう。学校を貸そう」ということで、夏休みに学校を借りて会場を作って、カリキュラムを皆さんの知恵を出して作って、いろんな講師の方を募って、部屋の割り振りも全部決めたり、夏は食中毒になったらいけないからお弁当を手配したり……。で、その制度がスタートしていったということです。それだけに言語聴覚士の資格ができたときは相当ショックがあったですね。「我々はこれだけやってきたのに、なぜなんだ」と。

司会 先を越されちゃった。

石井 その後に、「いやあ、それでもこれだけのことをやっているんだから、何とかしよう」ということで、ロビー活動を始めた。政党の部会や日耳鼻学会の理事会にも出席しました。それから、先ほど話が出た認定補聴器専門店が岡本先生から作れということで作りました。しかし、認定補聴器専門店というのは、我々が一生懸命やっても世間からは認められないので、第三者の認定機関が必要だ、ということで、テクノエイド協会にお願いしたんです。

もう一つは認定補聴器技能者の会ですね。認定補聴器技能者というのは自己の知識・技能を習得して

向上していく。そうしないと認定補聴器技能者の資格はないだろう。いつも会社の中に縛られた状態ではなくて、自覚を持つ認定補聴器技能者になってほしいということで、これも言語聴覚士のことを念頭に置いてJHIDAから別組織にしました。

JHIDA誕生秘話

福山 JHIDAと日補工とは同じ年にできたんですね。

石井 そうですね。

宮永 ちょっとだけJHIDAのほうが早い(笑)。

石井 まあ同い年です。

司会 福元さん、JHIDAの設立前後あたりではどんな思い出がありますか。

福元 その前に、販売店側のほうは武田さんが中心の振興協会がありまして、ここでいろいろやっていて、もう一人の御大の風間さんもおられて、最初は二人とも波長が合ってなかったんだけど、「総会するから、福元、おまえ議長せえ」と風間さんから言われましてね。その前に、リオンの営業部長の柴田文吉さんだったかな、新宿のリオンの地下の高級料亭でごちそうになって、「何とかまとめろ」(笑)。「えーっ？」ってことで、とりまとめというか、議長になったんですけど、まあすんなりと一緒になりましたね。

宮永 (笑いながら)すんなりでもなかったで……。

福元 猛烈に反対する会員もいましたけれどもね。

司会 結局10年間、振興協会はリオンさんのメンバーが入らずに、メーカーと販売店で歴史があって、リオンさんはリオンさんでリオン会があって、これを一緒にするにはそう簡単にはねえ……。

福元 かなり振興協会のほうで反対意見が強かったです。風間さんが最終的には下りてくれました。

司会 風間さんは反対でしたか？

井村 反対していました。

福元 私がわりと中立的な立場みたいだったから、「あんた、まとめろ」ということでね。

司会 緩衝材になったのですね。お疲れさまでした。

福元 それで、確か宮永さんと一緒に議長席に座った。

宮永 これをまとめるのには、武田さんをとにかくトップに持ってくるしかないなど。ところが、武田さんは当時フォナックの輸入をやっていました。そんなのはメーカーじゃないか。そんなのがトップじゃ認められないという強硬な反対意見が出てきて、その辺はちょっとまあ詭弁を弄したところもあったんですけども、福元さんがうまくまとめてくれて、まあとにかく発足しましょうと。

福元 でも、うまくまとまりましたよね。

宮永 そうそう。それはもう、この人の手腕です。

福元 いえいえ。

司会 手腕というより、お人柄じゃないですか。

福元 荒れましたよ。JHIDAの最初の準備会のときは。

宮永 その後、とにかく準備会が済んだ後、どこかへ食事に行ったんだよ。その場で酔っぱらった某氏に私はどつかれたんです(笑)。ま、そんなこともありました。

司会 JHIDAが初めスタートしたときは、会員は何名だったんですか。

福元 100名前後でした。

宮永 いや、100は超えていた。

福元 100超していたかなあ。

野々村 この資料によると、発起人会は60社68名と書いてあります。

司会 でもそれは発起人の数でしょ。

野々村 JHIDA設立発起人総会、発起人は25名。

司会 発起人が25名ということは、六十何店で始まったということですか。

菅谷 全国の初めて参加するお店の人たちへの根回しはどなたがやったんですか。

福元 各地域から理事さんを、地域によって、九州に2、3名とか中国に2、3名とか、有名などころの実力者に直接依頼して、それから2期目は各支部で選んでくれということで、本部のほうで専任がいて、それで広めてもらったんです。

司会 それは福元さんが、「九州は頼むよ」、「中国は間違いなく頼むよ」というのがあって……。

菅谷 それをリードしていく方が武田さんだったんで



福元 儀智氏 相模電機(株)

すか。

宮永 武田さんを看板にしようとしたのは、武田さんはリオンの代理店でもあり、振興会の関係もあり……ということで。この設立趣意書は私が書いたんです。

日補工のルーツ

司会 ありがとうございます。また思い出したことがありましたら、途中でも結構ですのでお願いします。

次に日補工の設立の歴史ですが、ルーツを考えてみますと、やはり岡本途也先生ですね。岡本先生がいかに我々補聴器業界に大きな足跡を残されたかなあと、いまさらのごとく感じています。ある日、昭和大学の教授室に呼ばれたところ、「アメリカでカナールという補聴器ができた。この補聴器はインプレジョンを外耳道の第2カーブまで採るとのこと。これは今までのイヤモールドの耳型採取より危険性が増してくる。これをてんでんばらばらに輸入されてはまずいので輸入メーカーをまとめてくれないか」と頼まれました。そこで、深津秀哉(日本補聴器販売)さん、小山啓(オーティコン)さん、徳永幸朋(NJH)さん、三上快英(フィリップス)さんたちに声をかけて、「全国輸入補聴器メーカー協議会」を作りました。そのとき、国産メーカーさんは「日本電子機械工業会」の「医用電子機器業務委員会 補聴器小委員会」の中で活動されていました。その2団体が後々、日補工となっていくわけですが、昭和61年(1986年)に厚生省が医療関連職種の国家資格化を検討することになりました。その中に「補聴器士」が入ることになり、日耳鼻

学会の岡本先生が代表となって、日耳鼻学会、日本オーディオロジー学会、日本電子機械工業会、全国輸入補聴器メーカー協議会らの団体が参加して「ヒアリングエイドシステム研究会」が作られました。この研究会を舞台に「補聴器士」という国家資格が検討されましたが、残念ながら諸事情により日の目を見ることはできませんでした。しかし、これがきっかけとなりテクノエイド協会に参画することになり国産と輸入のメーカーが大同団結して日補工が誕生しました。

大災害時の支援活動について

司会 大災害時の思い出ということで、日補工のほうは「災害時緊急支援活動指針」を作って、何回かそのように動いておりますので、その実績を記念誌に掲載いたします。JHIDAもこれから情報を集められると思いますが、阪神淡路大震災では、何といっても近いところにおられた宮永さんの当時の思い出を……。

宮永 私は阪神淡路大震災のときにはJHIDAの副会長だったんですけども、あのときは業界としての取り組みができたと評価されてもいいなと思っています。各メーカーさんはやはり自社の支援活動を目立たせたいという思いがあったと思いますが、阪神淡路大震災のときにはメーカーごとの対応ではなく日補工として対応していただいた。我々のほうもJHIDAとして対応いたしました。これは非常に良い活動だったと思います。

それぞれいろんな動きがありました。販売店の中には、「私のところ以外は全部つぶれて動けませんから、全部私がやります」なんて言って走り回った人もいました。他府県から兵庫県に「福祉の契約をしてください。神戸の業者は全部駄目です。全滅です」と言ってきた業者もありました。

福元 へーえ。

宮永 少なくとも業界団体として対応できたのは評価されてもいいんじゃないかなと思っています。私は更生相談所の囑託ということで行政とのパイプもかなり太く持っていましたし、難聴者団体とかボランティア団体とかと提携しながら活動できたというのは評価

されてもいいのかな。そのときにはまだ補聴器はアナログタイプが多かった。ですから、どこの販売店へどこのメーカーのものを持ち込まれても対応できたんですね。そういう環境が幸いしたかなと思いますけれども、本当に団体としての活動があつたときにはできたなど。

ここに当時の日補工からの報告書がありますが、どれくらいの人たちに対応できたかというような資料、これは日補工にあると思います。私、資料はほとんど処分しましたが、このとき合計251台の補聴器の調整料として、これも日補工から支援してもらいました。難聴者団体からのファクスでのやりとりとか、そういうこともずいぶんできた。後に起こりました東日本大震災と違ったのは、地域が限定されていたことでもあります。良い活動ができたと思っています。新聞社にも大変協力してもらって、広告料30万円だけ払ったのかな、それでかなり大きい広告を何回も掲載してくれたとか……。あのときにやはりすごいなと思ったのは、久米宏のニュースステーションが「こういう活動をやっているよ」とひと言報道しただけで、翌日はもう私のところの事務所の電話は朝から晩まで鳴りっぱなしでした(笑)。

福元 「ニュースステーション」でそういうニュースが流れたんですか。

宮永 「ニュースステーション」でやってくれたんですよ。その後、NHKの教育テレビからも取材を受けたりしましたけど。阪神淡路大震災については、そういう思いがあります。

司会 今、宮永さんの報告を感銘を受けながら聞いていて思い出したんですが、日補工の支援活動としてポケット型補聴器を250台ですかね。地震発生の10日後ぐらいにそれを持って小山さんと二人で被災地に乗り込んで行きました。

宮永 そう、来てくださった。

司会 東日本大震災——これは阿部さんから話してもらわないと……。

阿部 確かに宮永さんの阪神淡路大震災での対応の経験があったので、対応としては結構早急にできたとは思いますが。ただ、阪神淡路大震災のときと違っ

て各メーカーさんごとの対応になってしまって、メーカーさんによって対応の内容が違ってましたね。提供した補聴器の台数もトータルで1,000台は優に超したんじゃないかなと思いますけど、早急な電池の確保、ご提供など、阪神淡路大震災の経験がいろいろ役に立ちました。日補工さんの災害対策マニュアルが、この東日本大震災の後に作られましたが、今後の災害時の対応に非常に役立つのではないかと期待しています。

一つ印象に残っているのはハウリングの問題です。ご提供したのはいいんですが、イヤモールドを採るのが困難なので既製の耳せんを使ったら、夜、他の人がピーッという音に悩まされて、避難所から退室させられたり、自主的に屋外に避難した人が結構いた、そういう事例がたくさんありましたね。私も後で新聞社から対策とか意見を求められたときに、メッセージボードとかと併せて、ハウリング対策のお話もしました。最近はハウリングキャンセラーで改善されたと思うんですが、結構大きな問題として報道された印象があります。

宮永 そうい報道ありましたねえ。

阿部 報道はされませんでした。岩手県の販売店の社員さんでお父様が津波で行方不明になった方が

いらっしゃいましたが、その社員さんは被災難聴者の対応に追われて数日間は捜索活動に加わることはできなかったそうです。お父様の行方を気にしながら被災難聴者のライフラインである「聴こえ」の確保に努めた話を聞き、「すごいなあ」と感激したと同時に補聴器適合技能者の責任について考えさせられた記憶があります。

東日本大震災の死者・行方不明者は人口の1%を数えたそうですが、難聴者に限って言うと、1.9%にまで上昇するとの統計もあるとのこと。難聴者は災害弱者でもあることを肝に銘じて補聴器適合業務に就かなければならないと思いました。

第3部 補聴器業界の未来への提言

司会 続きまして第3部「補聴器業界の未来への提言」ということで、まずは井村さんから資格制度についてお願いします。

井村 私は何といってもテクノエイド協会を中心に今後の国家資格化について考えてもらう。ここが考える以外ないと思います。今まで、結構やってきたけど、どうもそれから先に進まない。もう一度アメ



リカとか海外の諸事情をよく調べてもらって、改めてテクノエイド協会を中心に、国家資格化について行政とか医学会のほうに働きかけてもらう。何か新しい考え方でいかないと駄目なんじゃないか。そうしないと繰り返しになるのではないかなあ。後輩に対しても申し訳ないですよ。

福山 話を戻して恐縮ですが、資格制度のことに關しては、議員連盟のことをひと言加えておくべきかと思ひます。

司会 はい、お願いいたします。

井村 議員連盟の、いつもJHIDAと一緒に行ってくれた小柄な議員の先生がいましたよね。どういふ活動を議員連盟がしたのかは記録に残しておいてほしいですね。

司会 議員連盟の資料を頂いておりますので、それを掲載するようにいたします。

阿部 確か平成16年(2004年)か翌年、そのあたりでしたね。

宮永 もう一つJHIDAの歴史として記録に残しておいてほしいのは、海外との交流。情報をいろいろ集めました。

尾上 海外交流に関しては、HISが編纂した「補聴器トレーニングマニュアル」の翻訳がありました。

石井 30年の歴史ということだったから、少し先走って言いましたけど、その間の重要な活動はというと、JHIDAの支部活動で講習会をやって、支部の人にどんどん勉強してもらったこと。メーカーさんが補聴器技能者のためのトレーニングマニュアルを作られたこと。「耳の日」の行事の支援や「補聴器の日」を作った



こと。欧州や米国の供給制度と専門従事者の現況視察や「補聴器供給システムの在り方に関する研究」を行ったこと。それから、補聴器販売に資格制度を取り入れるという考えには、販売従事者が単なるもの販売者ではなく、資格者販売にすると仕事に誇りが持てる、やり甲斐と生き甲斐が向上心や責任につながって、補聴器業界の発展と聴こえの不自由な人に幸せを提供できるだろうとロビー活動も力を入れて取り組んできました。厚生労働大臣に対する署名・要望。厚労省とテクノエイド協会にも要望書を出しましたよね。障害者自立支援法ができたときに、各自治体に認定補聴器技能者がいる店を契約してくれという要望書も出しました。そういう一生懸命やってきた活動がありますから、それらは記念誌に掲載されますか……。

司会 ぜひ、今言われたことを、ファクスでもメールでも結構なんで、事務局に送ってください。

冒頭申し上げましたように、過去30年間は証拠書類等がたくさん残っていますので、それらをまとめて、時系列として何をやったかを、両協会の活動として掲載するようにいたします。加えて、両協会の歴史については、初代の役員の方たちのお名前とか、日補工ですと会員メーカー名とか、そういうものをきちんと記録していこうと考えています。両協会が時系列に、このときに何があったか。それから、両協会に關連した団体あるいは行事としてどんなものがあつたかも、井村さんがとても詳細に作ってくれた資料がありますので、それを補足して掲載します。

石井 私は今高齢者団体に所属して、高齢者の方との接触が多いんですけど、高齢者の方の平均寿命が上がっています。健康だから平均寿命が上がっているんです。聴こえもよくなっています。だから補聴器が要らない方が多い。

前のデータとどう比較していいかわからないけど、非常に聴こえがいい。仲間同士で話するときには、お互いに若干声が大きくなりますが、通じるんです。そんなに補聴器を使っていません。高齢者の葬儀のときに数えるんですが、補聴器を使っているのはせいぜい1割ぐらい。

宮永 せいぜいそんなもんですね。

石井 それからもう一つ、厚生年金がない70代、80代の——農業をしていた方や自営業の方は、国民年金だけですから自分の蓄えを使っている。だから、「補聴器は高い。買えない。この先の年代の方は買えるかもしれないけど、今の私には高過ぎて買えない」というのがあります。

それと、「耳の日」とか「敬老の日」とかにはマスコミで補聴器についての特集がされますね。皆さん、補聴器を使おうと思って一生懸命見ているんですよ。そうすると、「補聴器の正しい求め方」ということで、「認定補聴器技能者のいる店に行きなさい」と言われる。皆さん、自分が若干難聴というのは分かっているから、補聴器の幟が立っている店に行くんですね。で、「認定補聴器技能者はいらっしゃいますか」と言ったら、「いや、うちにはいません。いませんけど、パソコンで補聴器を合わせますから大丈夫ですよ」と言われるというんですね。「せっかく、良い情報ももらったけど、そういう恩恵を受けられないのか」という話があるんですよ。

私は、国家資格でなくてもいいから、認定補聴器技能者という、あれだけ勉強した方が何か資格として持てるような自主規制的な資格制度を業界でやってもらいたいんですね。幟を立てる店については、そういう人がいるんだと。今すぐはできないから、5年先にこの資格制度に参加するなら補聴器を卸しますというぐらいの何か自主規制を作ってもらえれば、「ああ、それだけ増えたのか」と、周りも認めて何かやってくれるんじゃないかならうかと。

菅谷 メーカーがそういうところにしか卸しちゃいかんよと。

石井 そういうことをお願いしたいことと、何年前かに国民生活センターからJHIDA、日補工、日耳鼻、厚生労働省に対し業界指導をやってますよね。厚生労働省でも販売従事者を集めて全国で講習会をやり始めて今年で3年目ですか、補聴器の適正供給に対してちゃんと動いているわけです。日耳鼻学会も、補聴器相談医に処方箋が出せるようにするとか、いろんなことをやってますね。何かそういうことに応



えないといけないのでは。ぜひ、何かそういうものを自主規制で持っていただければ、ユーザーの高齢者の方は喜んでお店に行かれるし、相談にも行く。

相談に行ったら、「テレビが聴こえないんですか」と言っ、すぐ補聴器の話になるんですね。高齢者は難聴という自分が年取ったという意識が変わってくるから嫌なんですね。だから、テレビだけの聴こえ、何かの聴こえ、一つひとつに対応できるように話を受けてくれる、そういう社会にしてほしいということ聞いております。

司会 大変貴重なご意見ありがとうございます。簡単に幾つか回答させていただきますと、まず日補工としての基本方針は、補聴器を販売するお店には最低一人の認定補聴器技能者を在籍してもらう、これが大前提の目標です。

石井 まあ要望じゃないからね。そういう話がありますということで。

尾上 実は私、7年前にこの業界を離れて、補聴器のことをやってないと言ったんですが、生涯学習講座みたいな場を借りて、補聴器の話を年に4~5回やっています。いわゆるユーザーが補聴器のことをほとんど知らないんです。断片的に言われるのは、「確かに周りはそんなこと言っていたね。補聴器なんてうるさいとか言っていたけど、あなたの話を聞いたらよく分かった」と。次に出るのは、「じゃあどういふところで買ったらいいでしょうか」なんですね。今のお話のように、「認定補聴器技能者のいる認定補聴器専門店に相談して」という話をするんですけども、「じゃあ店の名前など具体的にどうなの」と聞かれた



ときに、もうそれ以上私は答えられませんというか、答えようがないですね。

私が言いたいのは、そういった活動——補聴器の話を、業界がするよりもボランティアでも個人でもいので一般ユーザーに向けてどんどんやっていただきたい。特に業界OBの方にお願いしたい。

ここにいらっしゃる方は大ベテランのOBの方だから、どしどし補聴器講座をやっていただきたい。私が今高校生を相手にキャリア教育のボランティア活動をやっているという話をしたのも、実は一般人が学校の教室で話をする許可をいただくことはなかなか難しいんです。しかし、子どものうちから補聴器のことを知らせることが私の夢であり、この実現のためのボランティア活動なのです。だけど、文科省とかいろいろな関係があるから、一方的にはできませんが、私は、それでも教室の中で行う講話の際に補聴器の話も時々入れるんです。そうすると、子どもたちの目が輝くんですね。それが一つ。それから担任の先生は、「補聴器というのはそんなに役に立つものなんだ。どこで買ったらいいんですか」、そういう話になります。ユーザーさんは「そんなにいいんだったら、どこで買ったらいいのか、どうしたらいいのか」とか、必ずそういうニーズがありますから、まずそうやって掘り起こした上で、今のようなきちんとした供給システム——石井さんのおっしゃる適正供給システムを築き上げるのは大事ですけど、肝心のお客さんにもっと補聴器のことを知らせることも大事で、いわば車の両輪です。業界のイベントだけでは難しいような気がするので、個人個人の働き、特にOBの方にそういうことをやっていただけたらと、思っております。

福元 一般の人用にパンフレットもありますよね。

尾上 僕はいつも日補工の八嶋隆さんをお願いしてパンフレットをもらって、生涯学習講座の場でそれを配っていますよ。

福山 私はハードウェアのほうですから、今現在の製品化された補聴器に対して「補聴器はなんで高

いんですか」という質問には「補聴器というのはひと言で言えばパソコンみたいなものなんですよ。ここにこういうソフトが入って、こういうソフトが入ってれば、お値段は高くなるでしょ。だから高いんですよ」ということなんですけれども、ああいう機能、こういう機能を考えると、ものすごいいろんな種類の機能が現実として備わっていることになるわけですね。もちろん、お値段は高いでしょうけれども。

この先、耳から入った情報が直接、脳神経に伝わって言葉として認知してもらえるような、その部分がどうしても補聴器そのものには足りない。補聴器はいつもそこにぶつかって、「補聴器はこういうふうにフィッティングするんだ」ということが形としてきちっと定義されていない現実があるんだろうと理解しています。ですから、「ある人にとって非常によくても、もう一人にとっては全く駄目だ」でも、それは補聴器本来の宿命で、これを前提にしてどのような進め方をしていくのがこの業界に求められている一番大きな課題ではないか。私はそう思っております。

福元 フィッティングがうまくいくと、言葉の理解度がよくなるというような錯覚がこの業界にはありませんかと思うんです。フィッティングというのはよく聴こえるようにすることであって、よく分かるようにすることとはちょっと違うところが私は気になっています。

司会 金山さんは何か将来への提言がありますか。

金山 ちょっと私は違うんです。もっとレベルが低いのかも分かんないんですが、補聴器を長年やってきて、まだまだ知られていないところが多いと思うんですよね。今尾上さんが自主活動されていることを伺いましたけれども、まだまだ補聴器の性能やその効

果を知らない人が多いんです。従って、もっともっと最初の段階から教えてあげる人がいないとまずいと思います。

じゃどうするかはいろいろあるでしょうけど、私の会社もそういうものに向かっていかないと駄目だなと。実情はもっとうんとレベルが低いですよ。そこを少しでも上げていくようなことをやらないといけないし、やってみたいと思っています。

宮永 私の考えではね、補聴器装用という行為は医療の一環として扱うべきである。これはもうずーっと一貫して私はそう思っています。医師をゲートキーパーとして、あの人が入り口なんですよ。そして専門職がカウンセリングとフィッティングを行って、そこに一定額の公的な補助がある。こういうドイツ型に近いものが望まれるのではないかなと思います。

しかし、補聴器の需要を考えると、石井さんの話にもありましたけれども、高齢者の難聴の進行度合いというのはかなり遅くなっています。それと、高齢者人口が既に減少に転じていきます。私の友人に介護施設を7カ所ぐらい経営している人がいますが、施設をどういうふうにして今後縮小していこうかを既に考え始めているんですね。65歳以上の人口はこれ

からほぼ横ばいで、2040年ぐらいからは減少に転じることがもう予測されている。これはもう間違いのないことなんです。

市場規模をどれだけ大きくしようかよりも、ここで立ち止まって、本当に役に立つ補聴器の供給はどうしたらいいんだろう。それを関係者で考えるべきだろうと思うし、先ほどから出ている資格制度の話になると、私は大変難しいだろうと思います。私はこういうときに、「今後の供給システムはこうあるべきだ。日本的ではどうなんだ」というモデルを考えて、さらに日本からむしろ世界に向かって、これから高齢社会を迎える世界に向かって発信できるぐらいのことをやりたいなあ、やればいいなあと夢見ているところです。

司会 貴重なご意見ありがとうございます。

本日は午後1時から5時過ぎまで皆さんからのご発言、ご意見、ご提言等をいただきありがとうございました。補聴器の仕事がいかに素晴らしい仕事かを改めて実感しております。そして、この良い製品とサービスを全国の聴こえてお困りの方々に確実にお届けすることが我々業界人の務めではないかと考えます。改めまして、本日は誠にありがとうございました。

開催日・場所：2018年(平成30年)7月5日、東京・神田



創立30周年
記念誌

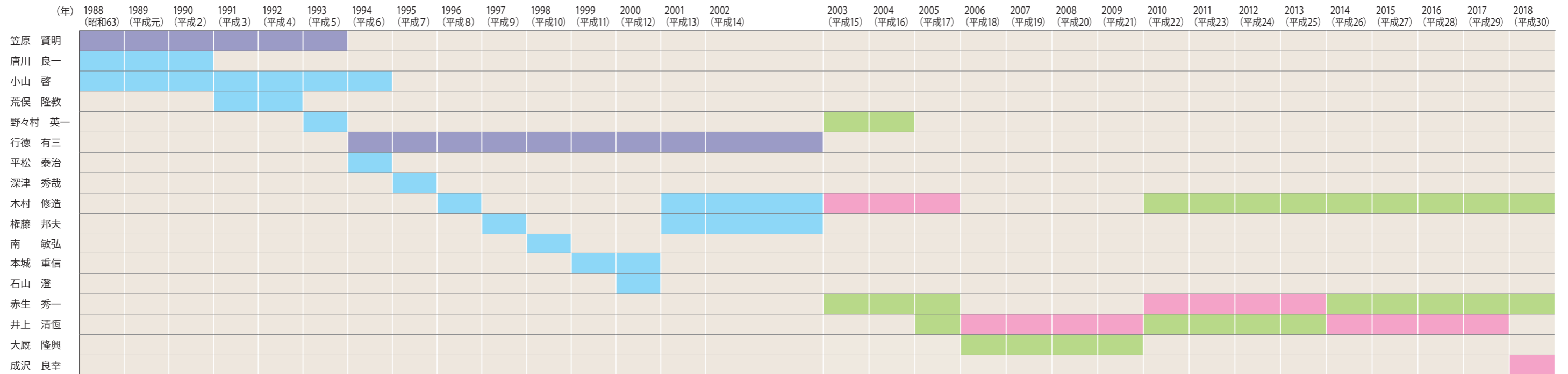
補聴器
業界の
歩み

5

資料編

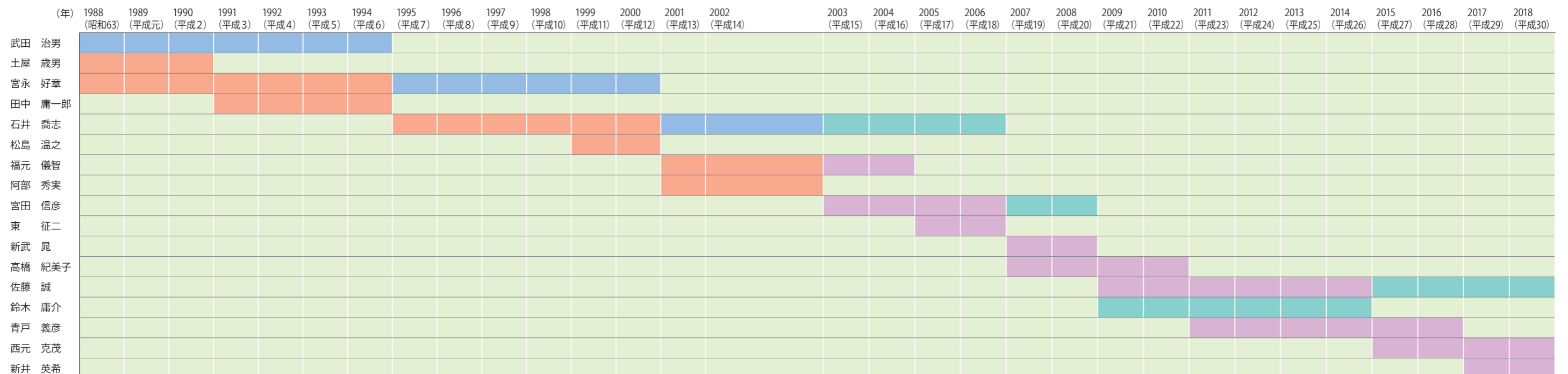
日本補聴器工業会 理事長・副理事長の変遷

■ 全国補聴器メーカー協議会会長
■ 全国補聴器メーカー協議会副会長
■ 日本補聴器工業会理事長
■ 日本補聴器工業会副理事長

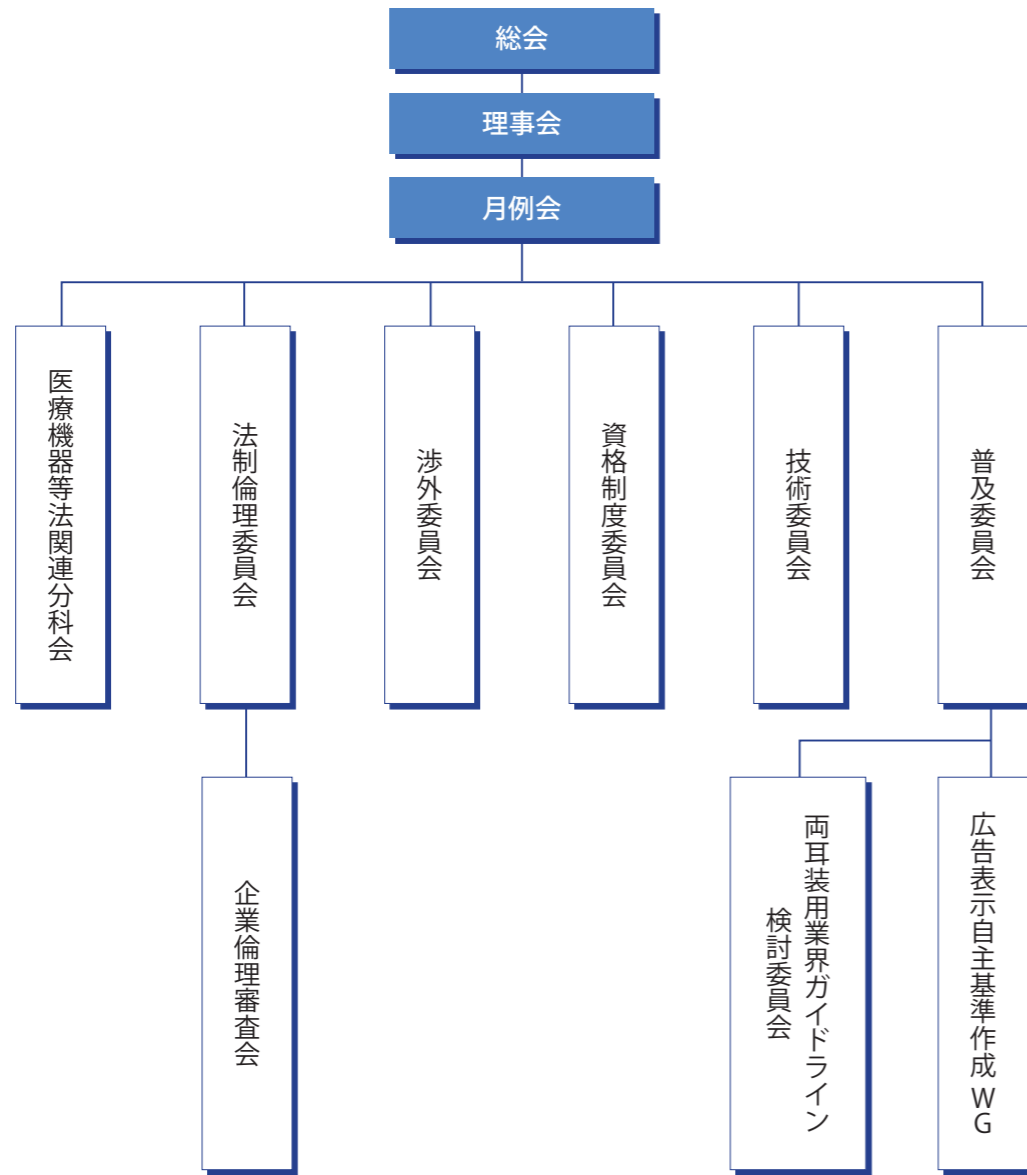


日本補聴器販売店協会 理事長・副理事長の変遷

■ 全国補聴器販売店協会会長
■ 全国補聴器販売店協会副会長
■ 日本補聴器販売店協会理事長
■ 日本補聴器販売店協会副理事長



日本補聴器工業会の組織・委員会構成 ※2018年現在

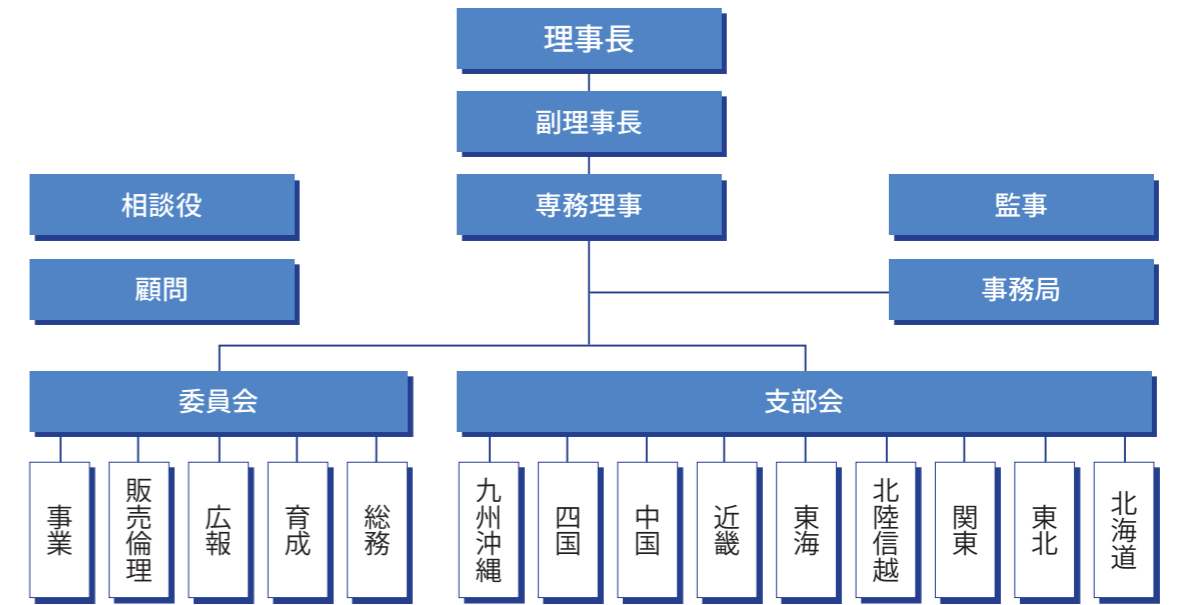


日本補聴器工業会 (2018年現役員)

役職	社員名	所属
理事長	成沢 良幸	リオンの株式会社
副理事長	木村 修造	日本補聴器工業会
副理事長	赤生 秀一	日本補聴器工業会
理事	田中 隆志	オーディコン補聴器
理事	齋藤 広幸	ソノヴァ・ジャパン(株)
監事	井上 清恆	リオンの株式会社
監事	豊谷 一郎	パナソニック補聴器(株)
事務局長	八嶋 隆	日本補聴器工業会



日本補聴器販売店協会の組織図 ※2018年現在

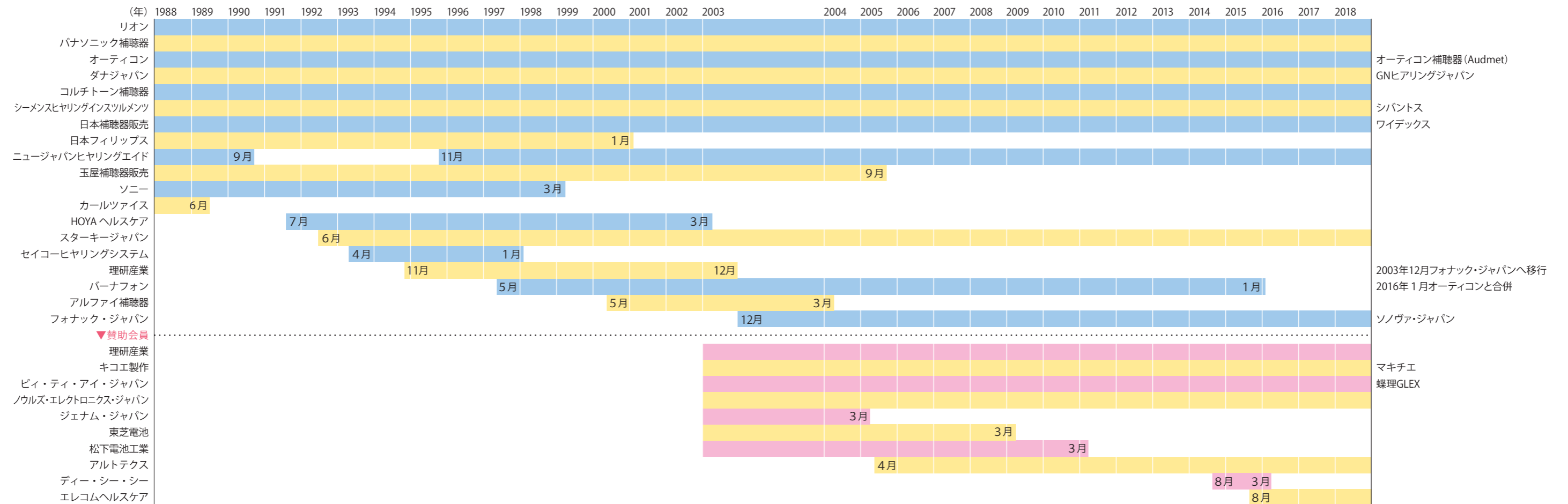


日本補聴器販売店協会 (2018年現役員)

役職	社員名	所属	支部	都道府県
理事長	佐藤 誠	ニイガタエイド(株)	北陸信越	新潟
副理事長	新井 英希	神奈川リオネット販売(株)	関東	神奈川
副理事長	西元 克茂	九州リオン(株)	九州沖縄	福岡
専務理事	青戸 義彦	さくら補聴器センター	北海道	北海道
常務理事	鈴木 庸介	(有)スズキ補聴器センター	九州沖縄	福岡
常務理事	竹田 利一	トーシン・補聴器センター	近畿	大阪
常務理事	平岡 昌三	(有)中国補聴器尾道補聴器センター	中国	広島
常務理事	高橋 紀美子	(株)秀電社	東北	山形
常務理事	小長谷 泰志	補聴器センターアイ	近畿	京都
理事	岩崎 充佳	岩崎電子(株)	北海道	北海道
理事	下田 和夫	(株)文明堂補聴器	東北	青森
理事	小川 行治	リオネットセンター城北	関東	東京
理事	松浦 勝美	(株)水戸リオネット補聴器	関東	茨城
理事	富田 岳彦	リオネットセンター船橋	関東	千葉
理事	内藤 幸輔	(有)ベスト補聴器センター	関東	千葉
理事	三戸部 恵一	(有)北山補聴器	北陸信越	長野
理事	武田 智彦	理研産業補聴器センター	東海	愛知
理事	内田 博子	補聴器専門店うちだ(株)	中国	岡山
理事	高橋 清	トーシン・高松補聴器センター	四国	香川
理事	山内 淳貴	アズマ補聴器センター新居浜店	四国	愛媛
監事	塚田 昭彦	補聴器センターつかだ		
監事	笠脇 伸元	(有)南大阪リオン補聴器センター		
顧問	田中 克己	日本補聴器販売店協会		
事務局長	高坂 雅康	日本補聴器販売店協会		



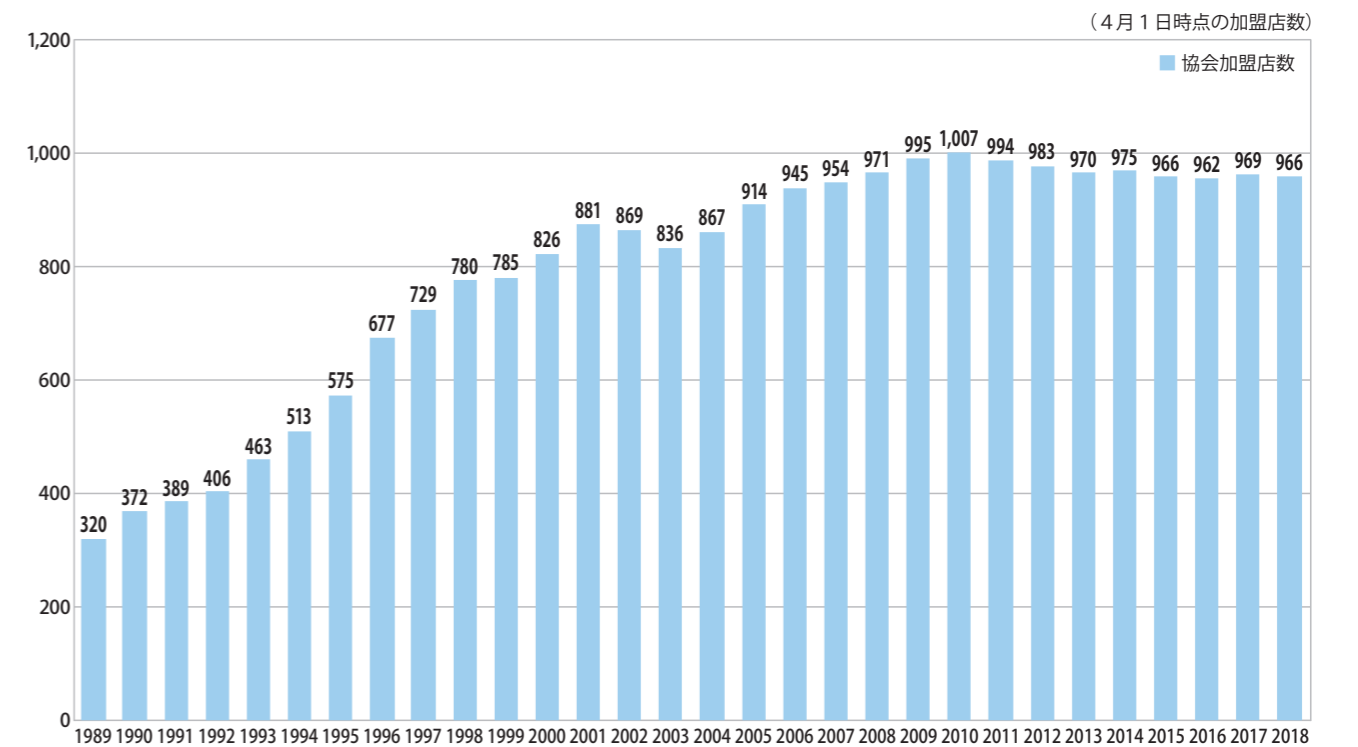
日本補聴器工業会加盟社一覧



2018年現在の日本補聴器工業会加盟社

- リオン株式会社
- パナソニック補聴器株式会社 (パナソニック株式会社)
- オーティコン補聴器 (Audmet 株式会社)
- GN ヒアリングジャパン株式会社
- コルチトーン補聴器株式会社
- シバントス株式会社
- ワイデックス株式会社
- スターキージャパン株式会社
- ニュージャパンヒヤリングエイド株式会社
- ソノヴァ・ジャパン株式会社

日本補聴器販売店協会 加盟店数の推移



認定補聴器技能者と認定補聴器専門店

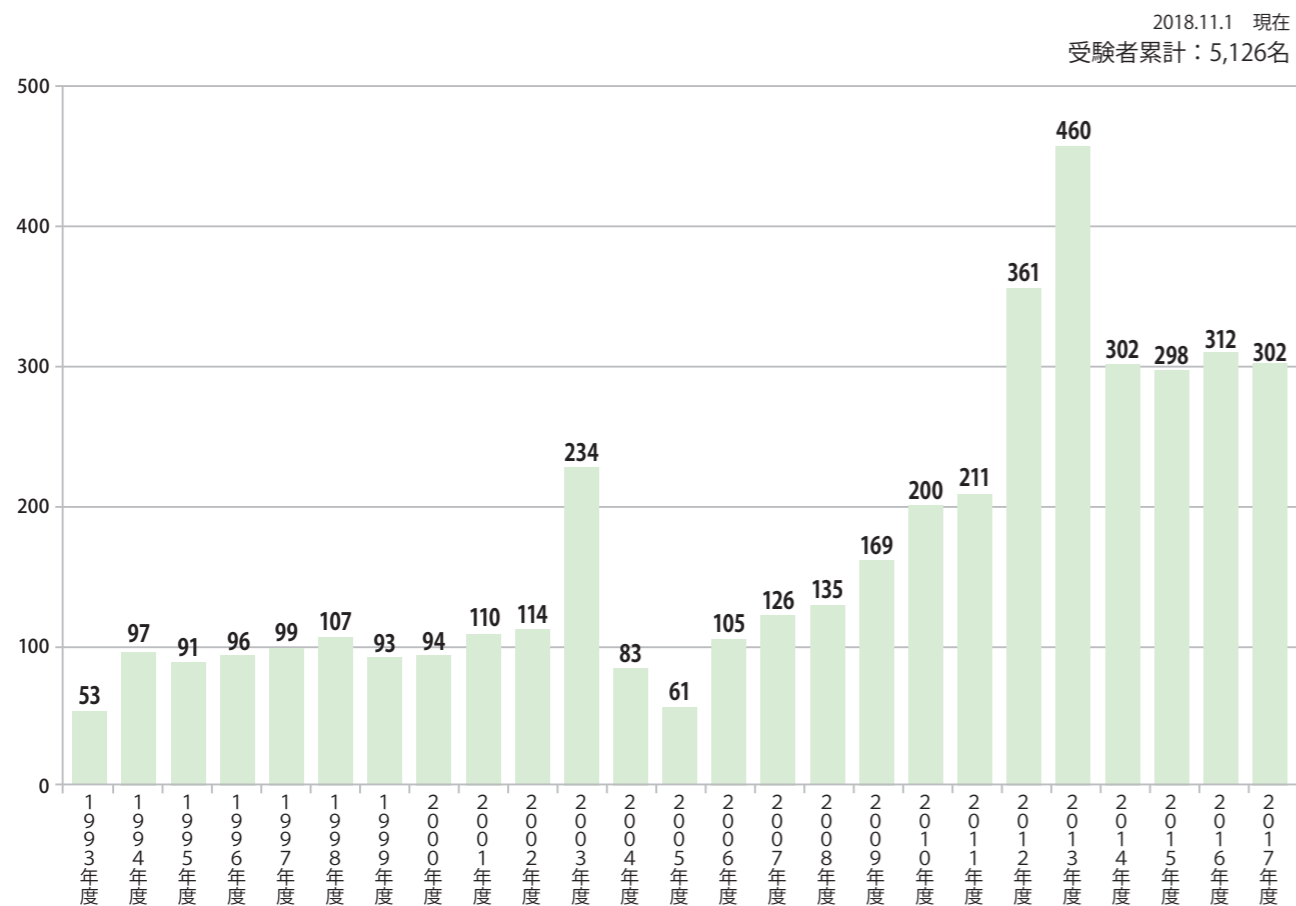
■認定補聴器技能者

公益財団法人テクノエイド協会が補聴器を購入される方の使用目的、使用環境、希望価格等についての相談に応じ、補聴器の適合調整、補聴効果の確認及び使用指導を適切に行うことのできる専門的な知識及び技能を習得した者を「認定補聴器技能者」として認定している。

認定補聴器技能者試験合格者数（累計）：4,313名（2018年3月末現在）

認定補聴器技能者登録者数：3,681名（2018年11月1日現在）

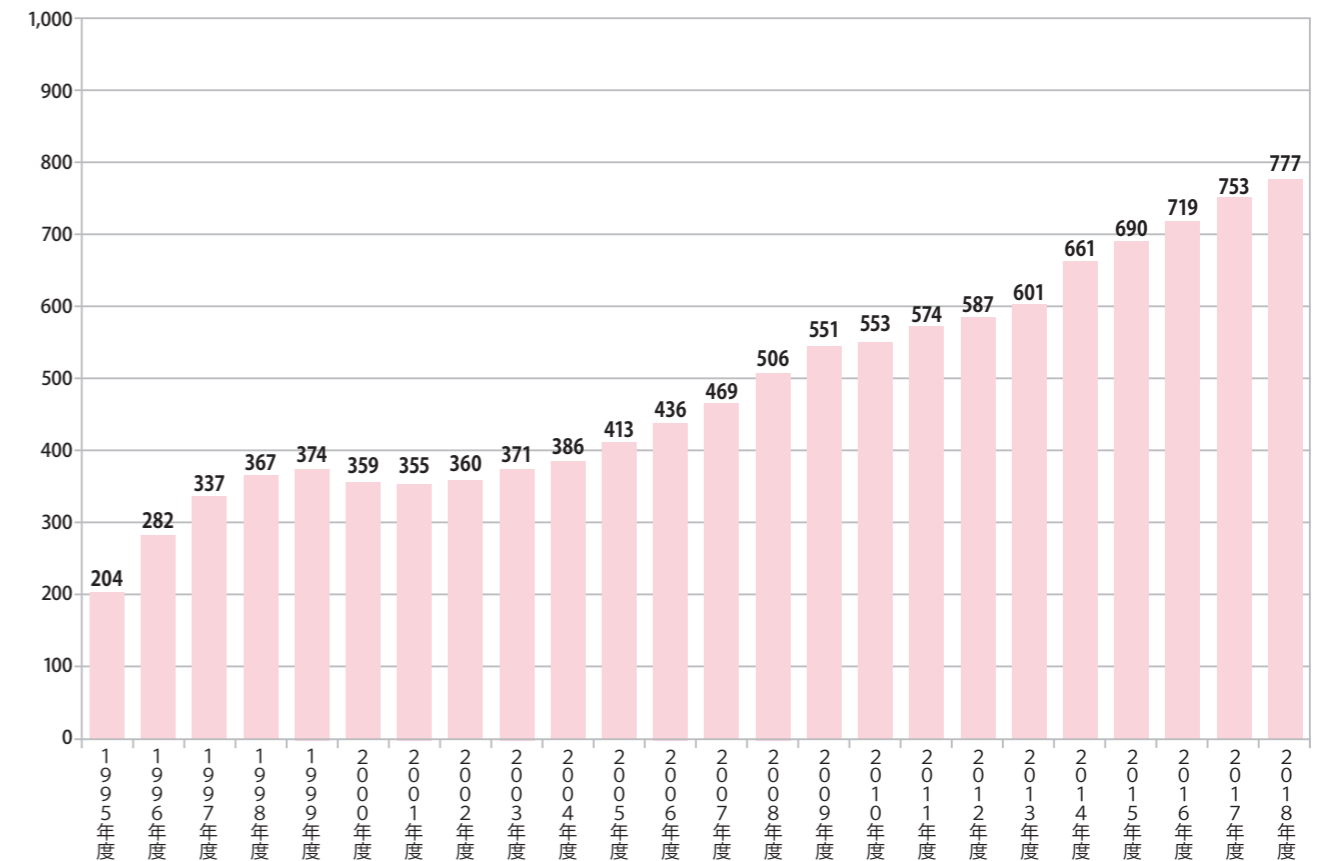
認定補聴器技能者試験合格者の推移



■認定補聴器専門店

公益財団法人テクノエイド協会が補聴器販売店からの認定申請に基づき、その店舗の補聴器販売事業が補聴器の適正な販売を行うために遵守すべきものとして定めている「認定補聴器専門店業務運営基準」に適合している補聴器販売店を書類審査および実地調査を行い認定し、当協会の認定補聴器専門店登録簿へ登録、認定証書を交付している。

認定補聴器専門店登録件数の推移





●参考文献 (順不同)

- ・『補聴器・聴覚検査機器の歴史年表』(1983年日本オーディオロジー学会)
- ・『補聴器のフィッティングと適用の考え方』(小寺一興)
- ・「補聴器機と関連分野の発展」(庄野久男)
- ・「Deafness in Disguise」(Washington University School of Medicine)
- ・「イギリス・ドイツ・デンマークにおける補聴器の供給制度と専門従事者の現況」視察報告書(1997年)
- ・「米国における補聴器供給制度と専門従事者の現況」視察報告書(1999年)

●資料提供 (順不同)

- ・公益財団法人テクノエイド協会
- ・一般財団法人小林理学研究所
- ・株式会社暮しの手帖社
- ・リオン株式会社
- ・パナソニック補聴器株式会社 (パナソニック株式会社)
- ・オーティコン補聴器 (Audmet株式会社)
- ・GNヒアリングジャパン株式会社
- ・コルチトーン補聴器株式会社
- ・シバントス株式会社
- ・ワイデックス株式会社
- ・スターキージャパン株式会社
- ・ニュージャパンヒヤリングエイド株式会社
- ・ソノヴァ・ジャパン株式会社
- ・マキチエ株式会社
- ・株式会社吉田勝恵商店
- ・補聴器/経堂
- ・木村 修造

一般社団法人日本補聴器工業会と一般社団法人日本補聴器販売店協会が平成30年に創立30周年を迎えるにあたり、両協会では共同して創立30周年を祝しての記念誌「補聴器業界の歩み」を発刊することになりました。そして、この目的を達成するために2018年3月に「創立30周年記念誌編纂委員会」を両協会合同のもとに設け編纂作業を進めてまいりました。

本記念誌の主たる目的は、我が国並びに欧米諸国における補聴器開発と流通の歴史を調査し記録すると共に補聴器を取り巻く諸環境・諸団体との関わりを記録することです。また、過去30年間に亘り両協会が活動してきた内容をも記録することといたしました。加えて、永きに亘り我が国の補聴器業界の発展に貢献された諸先輩による座談会を企画し、生き証人としての生の声を聞かせていただきました。

本記念誌は読者にとって判り易いように各トピックに関連して編集を行いました。編纂委員が各章をそれぞれ担当し原稿を作成してくれました。本編集後記を利用して各委員の多大なる努力と協力に対し改めて深甚なる感謝を申し上げます。

最後に本記念誌「補聴器業界の歩み」が今後補聴器業界に縁を持たれる人達にとって参考の一助になれば幸いです。

平成30年12月吉日

創立30周年記念誌編纂委員会委員長 木村 修造



創立30周年記念誌編纂委員会

委員長◇木村 修造

副委員長◇佐藤 誠・阿部 秀実

委員◇新井 英希・太田 昌孝・高坂 雅康・村上 眞吾・八嶋 隆

創立30周年
記念誌
補聴器
業界の
歩み

一般社団法人 日本補聴器工業会
一般社団法人 日本補聴器販売店協会

2019年(平成31年)2月発行

発行 一般社団法人 日本補聴器工業会
一般社団法人 日本補聴器販売店協会

編集 創立30周年記念誌編纂委員会

制作・印刷 株式会社ブレインズ・ネットワーク

